

烈士
胸
光三氏傳

特231

463



始



特 231
463

目次

- 一、ハルビン六烈士記念碑、脇光三氏の肖像
- 一、彦根市に於ける顯彰碑
- 一、拓殖大學校庭の碑、脇光三氏の書簡
- 一、脇光三氏の面影
- 一、壯舉關係略圖
- 一、脇光三氏顯彰と顯彰碑文……………一三
- 一、まへがき……………四一六
- 一、日露開戦と壯舉敢行……………七八
- 一、脇光三氏の生立……………九一九
- 一、壯舉の次第……………二〇四
- 一、烈士の最後……………四一六
- 一、烈士の遺功と餘榮……………六四一七一
- 一、脇光三氏への述懐……………七二一七九
- 一、あとがき……………八〇一八二



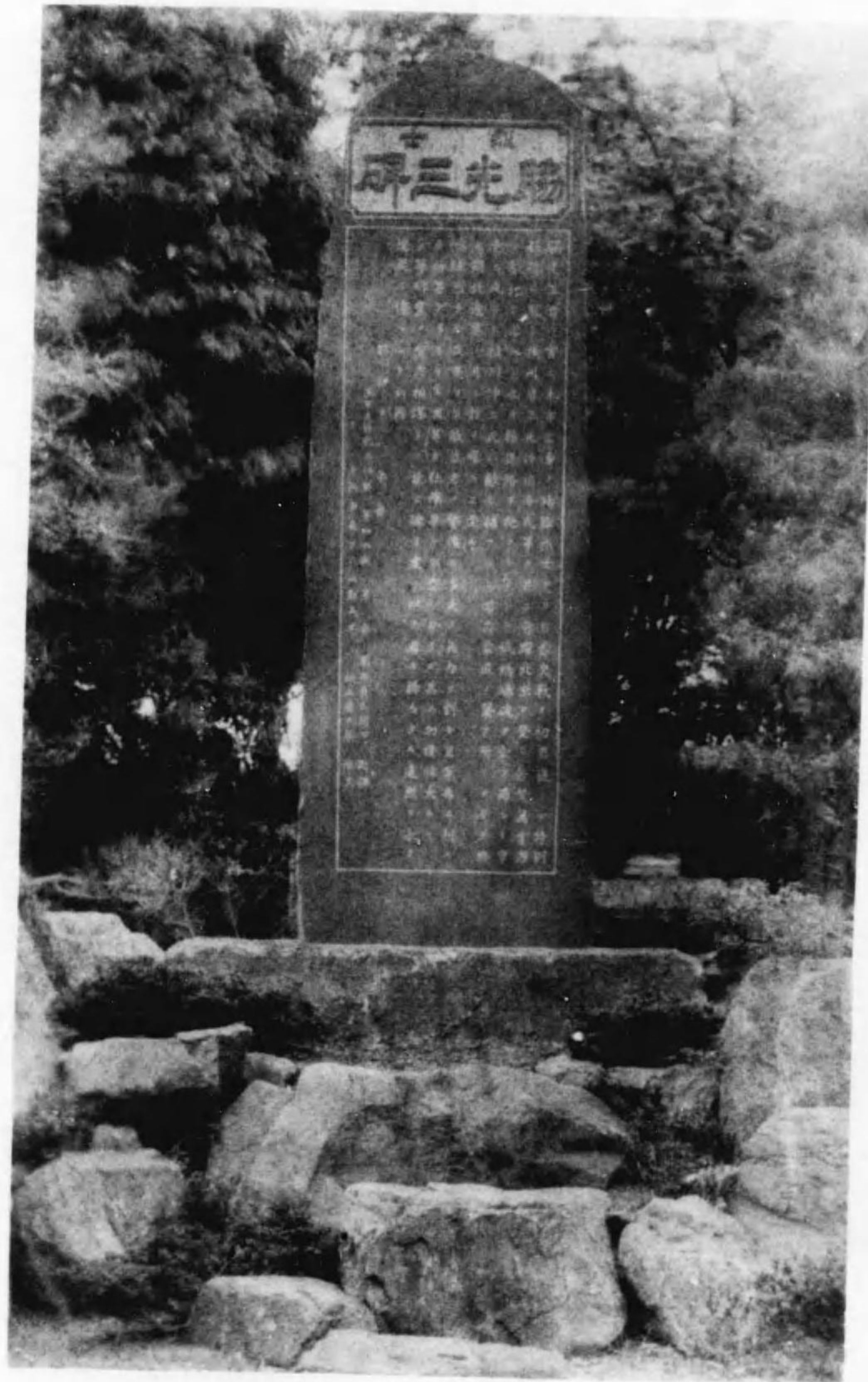
追加

- 一、特別任務班々長青木大佐が烈士家族に送られたる書状……………八三—八五
- 一、烈士脇光三氏顯彰事業概要報告……………八五—八七
- 一、建碑除幕式の次第、式辭、述懐……………八八—九三
- 一、在ハルビン滋賀縣人會の後援……………九三—九四
- 一、高源寺に於ける墓碑建設……………九五—九五
- 一、實父淺岡一氏の頌德碑……………九六—九八

ハルビン六烈士記念碑

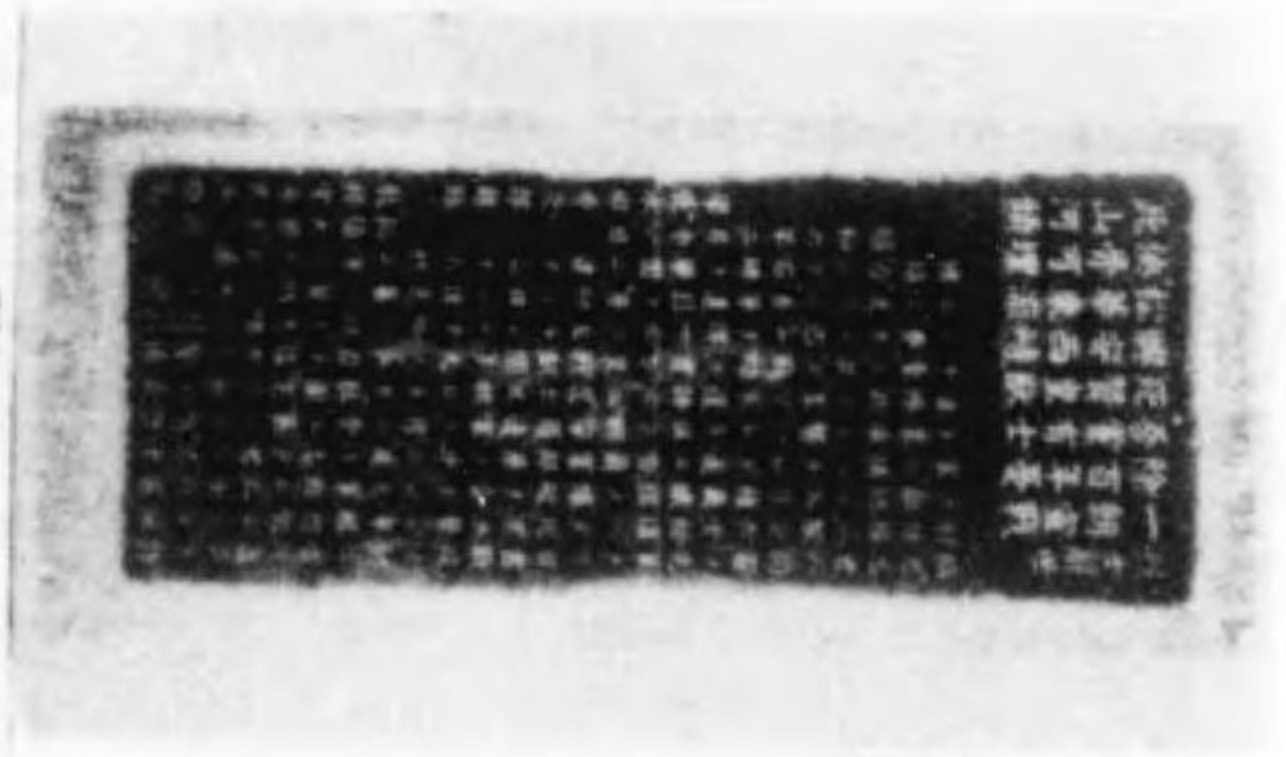


脇光三氏ノ肖像



彦根市に於ける彰彰碑

Handwritten text on a long strip of paper, likely a manuscript or a list of names, written in vertical columns.



(表)

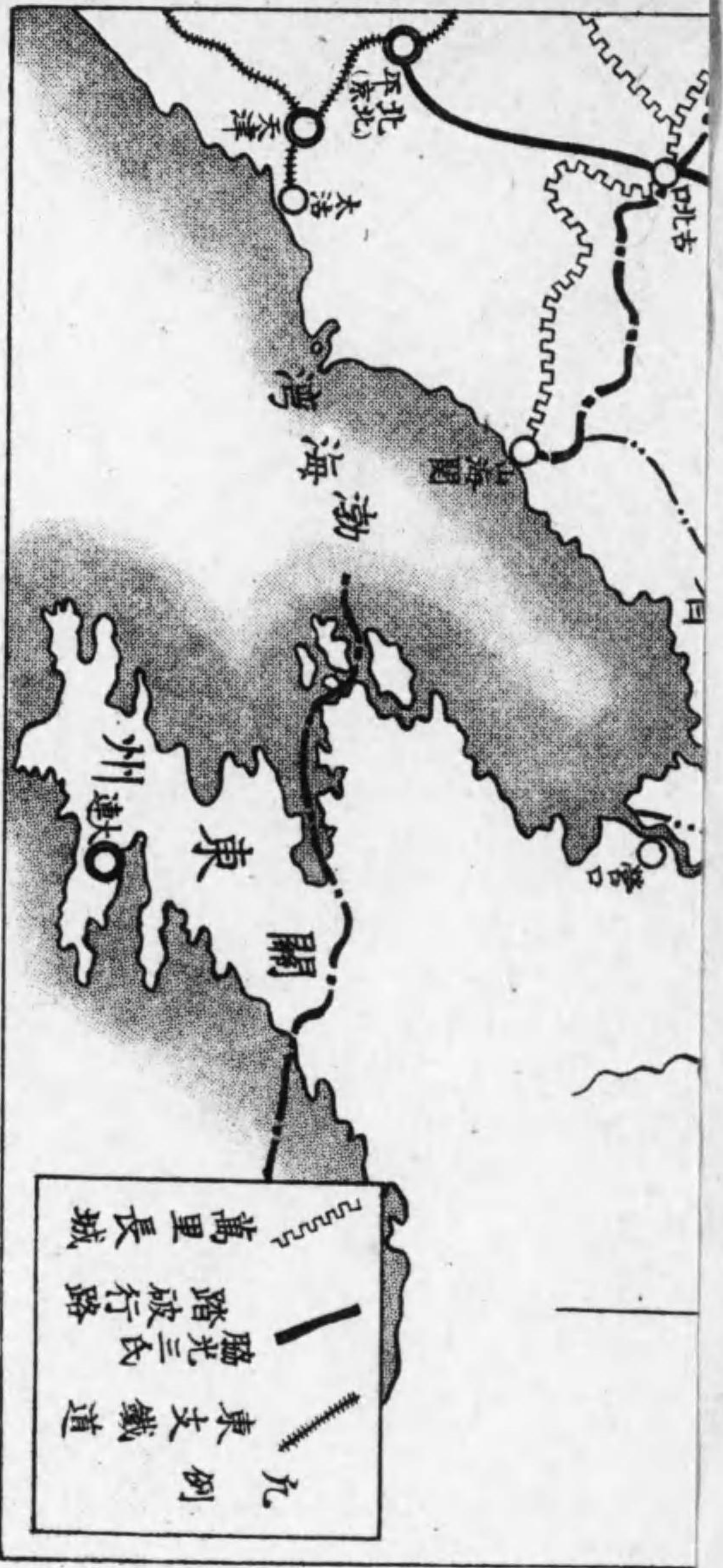


(表)

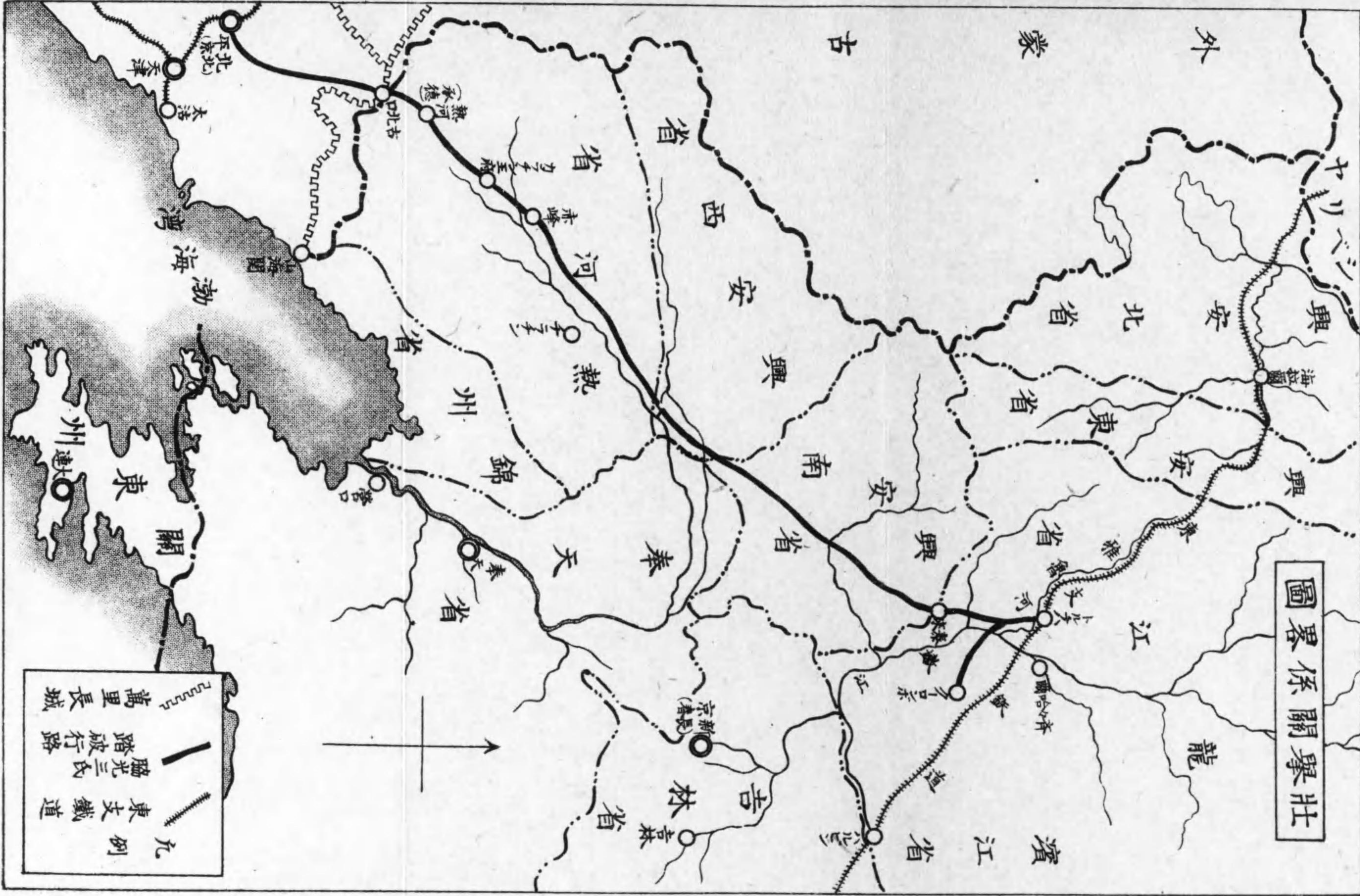
拓殖大學(母校)校庭ノ碑



影面の立生氏三光胎



壯舉關係圖



九例

- 東支鐵道
- 龍光三氏
- 踏破行路
- 萬里長城

烈士 脇光三氏顯彰

脇光三氏は彦根市出身の傑士、少壯有爲の英才として夙に信望篤く日本大丈夫の典型であつた。日露戦役勃發するや率先挺身、義勇奉公、献身報國の至誠を捧げ殉國の志士として靖國の神と仰がる。眞に郷土の生める忠君愛國の烈士である。その決死の義舉は國史美談として感激措く能はざる所、蓋氏の勳績たるや正に千載に芳し。茲に氏の略歴功績を蒐めてその人格を偲び永く後昆の模範として顯彰する所以である。

脇光三氏顯彰碑文

脇光三君ハ實ニ本市出身ノ殉難烈士タリ。白露交戦ノ初、君進ン
デ特別任務ニ服シ横川省三氏沖禎介氏等ト共ニ勇躍北京ヲ發シ苦楚
萬嘗深ク敵地ニ潜入シ、之ガ輸送路ヲ絶タントシテ鐵橋爆破ヲ企ツ
而シテ事竟ニ成ラズ。横川沖二氏ハ敵ニ捕ヘラレ、君亦蒙匪ノ襲フ
所トナリテ終ニ朔北邊塞ノ月ニ骸ヲ曝スニ至ル。噫壯烈ナル哉。是
ヨリ敵後方ノ警備ニ多大ノ兵力ヲ割キ、皇軍爲ニ利スル所甚ダ多カ
リキ。君等ガ壯舉果シテ空シカラズ。其ノ功績偉大ナリ。余等郷黨
ノ有志相謀リテ茲ニ碑ヲ建テ以テ君ガ赫々タル遺烈ヲ永ク後昆ニ傳
ヘント云爾。

昭和十八年春

陸軍大將從二位勳一等功四級男爵 荒木貞夫閣下題額

彦根市

彦根市長 正六位勳五等 松山藤太郎撰並書

ハルピンを訪ふ人の殆んど全部が參拜する六烈士の碑、人口に膾炙する沖、横川、親しく殉國誠忠の程を追懷して云ひ知れぬ感激に胸を打たれる。其際六烈士中の一人に滋賀縣人あり、然も其志士は彦根人なりと聞き初めて此北滿の地で、かゝる誠忠の烈士が我郷土より出でたるか今更ながら大なる誇と感謝の氣持に満たされる。

後日、同地への視察者からも同様な話を耳にした。知らないですまなかつた。此壯舉參加の脇光三氏、何さかして詳細に調べて機會ある毎に多くの人々に語り聞かせたいとの念願しきりであつた。

茲に於てあらゆる方面に亘り熟知諸賢を訪問し資料調査の再檢討

を行ふことゝなつた。

最も縁故深い八木原少將閣下に氏の生立ち並に人物について深き調査を遂ぐると共に、拓殖大學創立三十周年記念號附録、並に田中正明先生の大亞細亞先覺傳等を讀破し、ますく憂國殉忠のたゞならぬ志士の苦勞に感銘することが出來た。

特に當時活躍の河原操女史に親しく往時の回想談を承るを得たることと、脇氏令妹和歌女史による肉身の物語、各方面より資料貸與尙北滿地圖調査には彦根高商田中秀作先生の一方ならぬ御盡力を忝うしたる等、諸氏の御芳情に對し茲に深く感謝の意を表する次第である。

希くは大方の諸士、我等の脇光三氏、我郷土の譽、誇としての烈士の熱誠を追慕し英靈を慰むると共に氏の功績顯彰に協力以て英名を千載に芳しからしめられんことを。

因に

建碑に際し特に陸軍大將荒木貞夫閣下の題額御揮毫の光榮を忝うしたることを深く感謝致します。

烈士壯途出發の命日とした二月廿一日を記念して顯彰建碑に着手し殉難日たる四月十五日を以て慰靈祭日と定めたい豫定

日露開戦と壯舉敢行

明治三十七年二月六日、遂に日露國交の斷絶が決せられ早くも八日仁川沖の海戦となり日露戦争の幕は切つて落された。

矢はすでに絃を放れた。三國干渉このかた、臥薪嘗膽、實に十年間長い間の忍辱の殻を破つて敢然として起ち上つたのだ。

露國の暴虐に對する日本民族の煮えくりかへるやうな憤怒が、この瞬間に火の玉となつて爆發したのだ。皇國三千年の興廢を睹して世界一を誇る陸軍國西歐ロシアに聖戦の鉾を向けたのである。正に世界は瞠目した。

かくて國交斷絶間もなく二月十一日紀元の佳節に對露宣戦の大詔は嚴かに御渙發あらせられた。北京の志士、血盟の勇士は東亞の風雲の急なるを察知し夙に潜行調査に餘念なく悲壯な決意と計畫を進めてゐたのである。

いよく其日が來た。參謀本部より皇軍の成敗を期する重大なる訓令を受け、特別任務

班編成にとりかゝつたのである。

「われ／＼多年の辛酸苦修が酬いられる時がきた、今こそ挺身報國の至誠を捧ぐべきだ」と勇躍同志が糾合した。

北京に潜居する四十七名の同志、期せずして赤穂忠臣義士の面々と附合、愛國の熱血兒何れおとらぬ勇士達である。

此忠誠殉國の同志中に感受性の強い快男兒、脇光三君が加入してゐることは何たる誇ぞや「大君の邊にこそ……死して悔なし……」

「いまこそ醜の御楯として大君の御馬前に挺身することを許されたのだ。男兒の本懐之に過ぎるものはない。」との喜悅、感激、さこそと思はれる。

烈士 脇光三君、我郷土の志士、

その生立、其修養のたゞならぬものがあつたことが察せられる。

浅岡光三氏脇家に入る

脇家は明治維新前には彦根藩で祿二百石取の藩士の家柄で内曲輪の脇家の分家として今の二番町蓮華寺南側附近に屋敷があつた。

當主脇他三郎氏には子供がなかつたので何とかして良い子供をもらつて家を相續せしめ立派に御奉公させたいとの念願であつた。

明治十一、二年の頃、東京麴町の一番町に在る井伊伯爵の邸内に浅岡一ハシノと云ふ文部省の官吏が住んで居られた。夫人をタケ子といひ其間に二人の男兒があつた。浅岡氏の隣りに脇他三郎氏夫妻の家があつた。脇家と浅岡家とは單に隣同志といふだけではない程むしろ兄弟よりも親しく交際してゐたのであつた。

他三郎氏はかつて浅岡家に向つて同家の二男を養子にと懇望したこともあつたが一氏もこればかりはと中々承知しなかつたのである。明治十三年十二月一日浅岡家には勇ましい

呱呱の聲があがつた。この聲の主こそ一氏の三男後年の烈士脇光三氏其人であつた。

浅岡氏夫妻の喜悅は云ふまでもないことだが、それにもまして欣喜したのは誰あろう隣家の脇氏夫妻であつた。脇壽子夫人の如きは毎にタケ子夫人が光三氏に乳を與へるのをまぢ奪ふやうに光三氏を懷に抱き取つて自家へ伴れてゆくのであつた。その爲に光三氏も漸く他三郎氏夫妻に懷き遂にまことの父母のやうに暮すやうになつた。かうして他三郎氏夫妻は、もう光三氏が居なくては淋しさに堪へぬやうになつてしまつた。事實上光三氏は脇家に缺くべからざる存在となつたのである。ところが光三氏が生れてから約一年八ヶ月經つた頃に他三郎氏は福島縣廳の庶務課長に轉任することゝなつたので、いやでも光三氏と別れなければならぬ、でなければ光三氏を我子として伴れて行くか、いづれか一方をとらねばならぬ破目になつた。だが今となつて光三氏と遠く離れることは他三郎氏夫妻の忍び得るところではなかつた。そこで浅岡家に對し光三氏をせひ貰ひ受けたいと熱心に申し出た。かねて他三郎氏夫妻が光三氏を愛すること尋常でないのに感じてゐた一氏夫妻は

その申出を快く諾して茲に浅岡光三は脇光三と改められたのであつた。而して明治十五年六月の初めに他三郎氏夫妻は滿悅の中に光三氏を携へ福島縣へ赴任した。

養父 京都にて逝去す

明治十六年八月に脇他三郎氏は山形縣の庶務課長兼兵事課長に轉任し後に西置賜郡長、東田川郡長に歴任し二十一年十二月廣島縣技手として赴任し二十五年六月病を以て職を辭し京都に移つて靜養せられるまで光三氏は常に膝下に隨つてゐたが、二十六年九月になつて他三郎氏は遂に京都病院で逝かれた。時に光三氏は年齢十二年十ヶ月の少年であつたが終始枕頭に侍して看護し毫も懈怠の色が見えなかつた。他三郎氏の病勢革ると當時長野縣師範學校長の一氏は危篤の電報に接して大急ぎで京都病院に來て他三郎氏を見舞つた。他三郎氏は死を目前に迎へながら一氏を見て喜び遠來の厚意を謝しまつた。光三氏を愛兒として撫育することのできた幸福を語り、さらに亡き後には光三と養母との保護を頼むと一氏に向つて懇々と依頼せられたので一氏も快く引承け懇に他三郎氏を慰めた。其夜光三氏は

枕頭に在つて養父の容態の異状なるに氣付き、急を醫師に告げ醫師が診てすでに危篤に陥つたと云ふのをきいて直に休息中の伯母と一氏とに急報し、その來集をもとめた。やがて他三郎氏は是等の人々に護られつゝ靜かに永久の眠に入つたのであつた。

自ら死期を豫知して遠方の自分に報じ、その見舞を受けて後事を託して逝くなどいふことは眞に異常のことであつて、他三郎氏はどうも平凡な人ではなかつたやうだ、とは一氏が後に人に語つた所であつた。

家庭に於ける教養

脇光三氏の敢爲なる性格の萌芽は先天的に、その精神の中に存在したのであろうが、この性格を充分に助長成育せしめたのは家庭の教養であつたと思ふ。體格から云へば光三氏はむしろ蒲柳の質とでも言ふべく一見したところ頗る温順な人であつた。たゞ其眼光には不屈の氣魄をたゞよはしてゐた。

養父他三郎氏は篤行を以て人に稱せられ藩政時代には拔擢せられて一藩の子弟教育の任

に當つたこともあつた。従つて光三氏の教養についても行き届いてゐたことと思はれる。

また淺岡一氏の母堂即ち光三氏の祖母に當る人は典型的な武家の婦人であつたらしい。

光三氏は養父逝去の後は養母と共に淺岡家に寄寓したのであるが、祖母は當時八十才の高齡で常に孫達をあつめ明治戊辰の戦に二本松藩（淺岡家は其藩士）の士卒三百四十人が討死した壯烈な話を教訓混りに語りきかせて居られた。此役には光三氏の祖父靜翁、伯父與惣兵衛其他尙親戚の中に多數の戦死者があつたが靜翁の如きは、すでに老齡の故を以て隱退してゐた身で六十才以上の老人は婦女と共に城地を去るべしとの藩士の命あるにも係らず敢然として槍を提げて戰場に馳せ向ひ奮闘して遂に戦死したのであつた。この熱血は光三氏の脈管に流れた血の源泉である。而も祖母の武士的教養が之に加へられたのである。

光三氏の光三氏たるもの實に偶然ではない。明治二十六年二月に淺岡一氏は華族女學校教授兼幹事に轉任し上京せられたので光三氏も之と共に東京に移つた。光三氏は元來自分が家に寄寓するやうになつて始めて一氏が實父であることを知つた。そして養母に對して

はもとより實父母に對しても尋常ならぬ孝心を盡し人々の嘆稱する所となつてゐた。

光三氏の養母壽子未亡人は明治二十七年頃に腦溢血症に罹り半身不隨となつて居られたが二十九年十月遂に永眠せられた。その間光三氏は晝夜をわかたず看護をつゞけてゐた。而して養母の死後、近親に家政不如意の人があつたのに同情し實父の許を受けて養母の遺品を悉く寄贈した。その義侠的の行爲には親戚知人皆感激したそうである。

光三氏が小學教育を受ける時代は脇、淺岡兩氏とも頻々と各地に轉任したので光三氏は山形、廣島、京都、長野、東京と幾度も轉校を餘儀なくされたのは確かに不幸であつたと云はねばならぬ。最後に麴町小學校を卒業し、日本中學校に入り明治三十三年に同校を卒業したのであつた。

父の他三郎氏は幼時より穎敏、特に書を好んだ。母の妹である八木原家には子供がなかつたので其人の世話になつてゐた。後年此叔母に對して母の如く仕へた。此叔母の話に「他三」は紙さへやつておけば大人しい子であつた、と。青年時代かの西村捨三氏と兄弟

の如き親交を結び共に上京し内務省に入り京都の公卿藥師寺の娘を娶つた。壽子夫人はその人である。他三郎氏の山形縣在任中、櫓にて旅行せし時、その櫓が轉覆し受けた傷が原因となつて死期を早めたとも云ふ。光三氏は養父母に伴はれて數次彦根に来て八木原家に滞在し彦根の風物を樂んだ。他三郎氏が京都に靜養中は八木原家の叔母は多くは京都にありて看護に従事した。臨終の際に光三氏の休息中の叔母と一氏とに急報せりとあるは此人のことである。

日本中學在學中、夏休みを彦根八木原家に過したるが如きは養家に對する愛着心の強かりしを知ることが出来る。其行動實に果敢で眼光鋭く人を射るが如くであつた。横田の叔母（養父の兄弟）は當時片原（安居喜八氏の裏に當る所）の長屋に住んで居たが何時も「光さん」が來ると一べんに家中を見廻すから氣兼ねした、と云はれた、僅か十五六の青年ながら如何に精神的に異狀な發達をして居られたことを察することが出来る。

臺灣協會學校在學中渡清する事

光三氏は祖母の戊辰戦役の話に感奮する所があつたものか軍人になる志望を以て中學卒業の年に陸軍士官學校へ入校の志願をしたが體格検査で胸圍狹隘の故を以て不合格となつた。そこで斷然軍人志望を思ひ切つて翌三十四年に今の拓殖大學の前身たる臺灣協會學校を選び之に入學したのであつた。そして前年の體格不合格に發憤し、身体の強健に意を用ひ、柔道を練習し冷水浴と機械體操とを日課とし大いに身心の鍛鍊を圖つた。趣味としては薩摩琵琶を奏でつゝ勇壯に吟ずることであつた。北清事變以後に於て露國の東亞に於ける行動はまさしく我國人をして不安の念を深からしむるものであつた。此時に當つて何事か期する所あつた光三氏は三十五年に學校の清語講師賀培桐氏と議つて渡清を決意し五月二十八日東京を首途した。そして一路北京に行き同地で東文學社に入つて清國人に日本語を教へ自分は支那語を研究してゐたが後に沖禎介氏等と共に退社した。それから後中山直熊氏と北支毎日新聞社に入り文筆を振つて居た。

特別任務に服する事

日露兩國の開戦が目睫に迫つた三十七年の一月、駐清公使内田康哉氏や公使館附武官砲兵大佐青木宣純氏等は特別任務班を組織して某々方面へ派遣することを策した。而して警務學堂の監督川島浪速氏、公使館通譯官島川毅三郎氏其他の盡力で志操堅固なる勇士を選び一部の現役將校を加へ茲に若干の特別任務班が組織せられることになつた。

當時北京の樸園などは日本志士の集合所であつたから、そこからも相當の人が特別任務に加はつたのであつた。光三氏の屬したのは其一班で人名は左の通である。

班長	横川省三	(岩手縣 盛岡市)
	沖 禎介	(長崎縣 平 戸)
	松崎保一	(宮崎市 上別府)
	脇 光三	(滋賀縣 彦根市)
	中山直熊	(熊本縣 黒萩町)
	田村一三	(宮崎縣東諸縣郡綾村)

横川氏はかつて新聞記者として郡司大尉の千島探險に行を共にした程の冒険家で年齢四十を越え沈着周到であるから一行の頭首と爲つたので班員の選定も一に横川氏の方寸に出たものであつたと云ふ。尙この他に支那兵が途案内として三名隨行した。之は練兵處大臣袁世凱氏舊部下の者で保定の軍隊から選ばれて來た李永奎、毛如林、趙玉等であつた。

第一班の編成は一月の末に定り、光三氏は實父一氏に宛て、今回國家のために死を決して事を爲さんとする旨を通知した。また二月某日、北支那新聞紙上に脇華堂の名を以て中山直熊氏と共に清國各地漫遊の途に就くと云ふ廣告を掲げた。

この時に自分の寫眞を一氏に送つたがこれが此の世の訣別を意味するものであつたことは後でわかつた。

特別任務班の編成

第一班、伊藤、横川班

班長、伊藤、横川以下十二名（内六名が軍籍にあるもの）

而して・脇光三氏は軍籍にあらざる組にして横川省三指揮下に屬したのである。

第二班、井戸川班、（新民屯方面に行動）

班長、井戸川辰三大尉以下九名

第三班、津久井班（北滿方面に行動）

班長、津久井平吉外四名

第四班、橋口班、（遼西方面に行動）

班長、橋口勇馬少佐外十四名

第五班、情報班、

班長、江木精夫少佐外五名

第六班、諜報班、

青木武官直屬とし情報班關係の土井大尉と川崎大尉とに擔任せしむ。

壯 學 の 次 第

二〇

明治三十七年二月二十日の夜、特別任務班員一同訣別の宴を開いた。北京の二月はまだ極寒の時節で寒氣凜然粉雪さへちらちら降り出して何ともいへぬ陰惨な底冷えのする晩であつた。死生の大事を明朝に控へての宴席、さすがに一同云ひ知れぬ感慨に時を移した。いよ／＼各自所定の場所で變装した。支那商人となり蒙古人らしくする爲に頭髪を剃り落して、假の辨髪をつけるのである。

喇嘛僧姿になるものは頭を丸坊主にして黄や紅の衣をまとふのである。この頭髪を剃る時各自の髪と生爪と一緒に白紙に包んで各々署名をした。これはお互ひが何處で殺されても何處で自殺しても遺品として遺族に送るべき用意であつた。

支那服に着換へるもの、蒙古人に變装するもの、喇嘛僧に扮するもの……やがて、多種多様の俄造りの變装ができあがつた。そして各自一人一人、火薬を入れた長形の麻袋を腰にまき、雷管を油紙につゝんで内袋に收め、導火索一丈二尺づゝと、銀塊五百元入りの

袋を腰に下げた。

やがてそれ／＼異様な支那苦力、蒙古土民、喇嘛僧ができあがつた。それは實に奇々怪々の變化であつたが、もはや誰一人として笑ふものはなかつた。さて用意は整つた。

骨を刺すやうな寒氣は強まり静寂のうちに夜は次第に更けて行つた。設けられた室の正面高く祭壇が設けられ嚴かに天照皇大神宮が祭祀られてある。

神饌と神酒、御幣、神、神鏡も安置され二基の燈明台には清淨な光がある。この森嚴を拜した瞬間、一同ハツと息を呑み、こみ上げてくるものをちつとこらへてうなだれてしまつた。守備隊長と青木大佐が副官と共に嚴肅な面もちに入つて來た。全員起立、敬禮を終ると副官は白紙の包をのせた三寶を恭しく大神の御前に供へた。この白紙の包みの中には四十七人の頭髪と生爪が收められてゐるのである。副官の號令で三拜二拍手の禮を捧げた。終ると青木大佐は同志一同と相對し莊重な口調で一語一語、魂の底に刻みつけるやうに「これより、天照皇大神宮の大前に、特別任務班四十七名の宣誓を行ふ。しかして殉皇絶

忠の大義を護持し、天業翼賛の聖使命を貫徹せんがために、一同大業成就を誓ひ、最後の別盃を交さうと思ふ」と述べ朗々と宣誓文を朗讀した。

◎宣 誓

「掛卷も畏き天照大神の御前に畏み畏み曰す、臣等血盟四十七名、茲に一死を誓ひ、西伯利亞、東清兩鐵道を爆碎して、露國の暴虐無殘を制壓し、皇軍をして勝利に導入し、以て大義を宇内に宣揚し、皇威を八紘に光被せしめんことを誓ふ。」右宣誓す。

大佐は恭しく宣誓文を祭壇に供へた。神酒を一同に酌いで廻つたがそれは酒ではなくして冷たい水であつた。

「諸君の武運を祈り諸君とともに訣別の盃を擧げる。もとより生還は期すべくもあらず、生きて再び諸子に相見える機はないであらうその意味において今宵の盃は神酒にあらずして水の盃である。」

水盃だ!!、ぐつと胸にこみあげてくるものがある。國に殉ずる益良夫の生命の水だ。

大佐の言葉が終るや、聖壽彌榮を唱へ奉つて一同土器の水を乾盃した。冷たいものがさうらに決意を引き締めるかのやうに、肺肝に滲みていつた。

生を享けて今日まで、かつてかゝる強き純粹なる感動があつたであらうか。

死して悔なき喜悅! 感激!!

七度び生れ、七度び死すとも、この志業は必ず成就してみせる。いや必就せしめずにおくべきや。

「諸子は陸上の水雷だ、敵の腹部に、黄色火薬とともに散華するを辭せぬであらう。だがしかし、ただ生命を捨てるが尊きにあらず、事を決行するに、單に一回だけでなく、變幻出沒して、命のあらゆる限り執拗に喰ひ下つてあくまで所期の目的を達成せんことを切望する。諸子の前途には死の難關が控へてをるのみならず、それまでにいたる言語に絶する幾多の困苦と缺乏があるであらう。諸子の嚴正なる判斷と臨機の處置をもつて最善を盡されたい。」

青木大佐の言葉がひしひしと胸にこたへる。懇切なる注意と命令の後、大佐はさらに言葉を変えて、

「最後に一言傳へる。誰がいつ、どこで殺られるとも、諸子の命日は、二月二十一日とする。すなはち、明日の未明を、その命日と定めておくぞ……」
かくて悲壯にして嚴肅なる最後の訣別の宴は終つた。

烈士達の悲壯なる遺書

いよいよ特別任務班の先發隊が出發するの日は迫つた。彼等はそれ／＼すでに認めてあつた遺書に毛髪と爪とを封入して故郷へ送つた。當年の烈士の面影が偲ばれる。

○脇光三氏の遺書

(前略) 天津より北京に來り青木大佐と會見致し候、小子も愈々特別任務班に採用せられ不日北滿方面へ出發のこと、相成候。大日本帝國未曾有の國難に際し、一身を國家に捧げることは小子の最も愉快とする處に有之候。生還は固より期し居らず、父上様に再び拜

顔することは到底出來難しと奉存候。

書中

國家の爲一身を捧ぐるは最も愉快と言ひ又生還を期せずと云ふ一言は悲壯の中にも氏の平素が偲ばれて自ら熱涙の湧き來るを覺える。

萩原新生氏の「國威宣揚物語、決死の密偵行」の一節に、

脇光三君は青年時代早くも頭角を現はし、同僚から推されてゐた。玲瓏玉の如き好青年で容貌秀麗、資性温厚、しかも凜として犯すべからざる氣概をもつてゐた。

また無邪氣な青年で一向死の恐怖を抱いたことなく死生のことなど更に念頭にないといふ風であつた。天津に在留中邦人間にその名を知られ特に駐屯軍司令官仙波少將に可愛がられた。かくて日露の外交談判いよいよ破裂せんとするや、彼は國難近しと見て心ひそかに報國の期あるを待つてゐた。恰もよし青木大佐の特別任務班募集の内報を知り、勇躍して志願し同僚中山直熊と共に採用せられたのであるが、彼こそ實に志士中の最年

少者であつた。かれは常に父兄の身の上を思ひしばし通信を怠らなかつたがまだ特別任務加盟のことについては報らせなかつた。いよいよ近く遠征の途に上ると確定してから始めて前記のやうな手紙を實父淺岡翁に送つたのである。云々と記されてある。實に脇氏の面目躍如として表はれ勇ましい人格が伺はれる。

壯途出發の意氣

東天は白み明星が二つ三つ拂曉の紺碧の空に寒氣凜烈、その中に出發準備は整ふた。伊藤大尉も若林も中山も脇たちも乗馬で馳けつけて來た。第一班の出發だ。朝の冷氣で馬の吐く息が白い。たゞ目と目で挨拶を交したまふ、この異様な服装をした一行は黙々と苦力や車夫にまじつて北京北門を出た。

東洋千年の古都を蔽うた皚々たる純白を、朱に染めて昇臨する太陽の姿を仰いだとき同志十二名は思はず馬をとめて手を合せた。

この素晴らしき黎明こそ祝福すべき萬里遠征の第一日である。彼等を待つ大いなる運命が、これより展開されんとする。あゝ、明治三十七年二月二十一日。そして、この黎明こそ彼等の生涯に烙印された命日なのである。

旅程第一日を石匣鎮に明かし霜を踏んで古北口城門に第二日目の太陽を仰いだ。

溪谷から山頂へ、山嶺からさらに山嶺へ、雲を呼び雨を起して、蜿蜒萬里につらなる長城の壯觀を俯瞰したとき、一同思はず喊聲をあげた。折から雲霧を排して爛々たる太陽が萬里の長城に映えて輝いた。同志等の長い影が雪の山肌に映つただされてゐる。

脇光三は、この燃ゆる太陽に向つて若き血汐のたぎりをそのまゝに一詩を朗々として吟じはじめた。

一朝	宣戰	除	百年	憂
吾黨	有士	死	贊	皇猷
興安	西峙	松	華	東流
俠骨	可埋	此	山河	頭

脇の張のある美しい聲に、うつとりと聞きはれてゐた横川が「脇君、でかしたぞ、さすがだ」と、讚嘆して肩を叩いた。

(現在この一詩は碑に刻まれ、古色蒼然たる拓殖大學校庭に建てられ、拓大生は朝夕この碑文を拓大魂の權化として貴んでゐる。)

(寫眞參照)

一行は承德を目指して旅程をつゞけ更に熱河の荒涼たる沙漠地帯を一路、北へ北へと進んで行つた。

人目を憚る身故、出来るだけ宿屋を利用せぬ様にしたが、時には旅宿に泊らねばならぬ時もあった。或る時は晝間の疲れに温突の上にグッスリと寝込んで居る間に、帽子に取付けてある辨髪が土間に落ちて居るのを宿の者に拾ひ上げられ、互に苦笑を漏したと云ふエピソードを演出した事もある。

かくして猛烈な風雪を衝いて苦難な旅がつゞけられたのである。あゝ何たる壯舉ぞや!! 直隸平野を横ぎてつ行く志士勇士の凜々しさは之を想像するさへ血の沸くを覺える。

むかし荆軻は燕を辭し秦に向はんとして、

風は蕭々として易水寒し

壯士一度去つて復還らず。

と歌つた。志士等の心事の壯烈なる蓋し之に勝るものがあつた。

(前掲の詩、「一朝……」は光三氏が河原女史に託して、兄の次郎氏に送つたものである。)

旺盛なる意氣、悲壯なる決意、字々是れ血である。是れ火の玉である。勇しい哉!!

女丈夫河原女史に逢ふ

一行は漠々たる荒野に氷雪を踏んで進むこと約十日にして三月一日頃蒙古の喀喇沁王府に到着した。王府には日東の女丈夫河原操子女史が單身招聘せられて蒙古人の子弟の爲教鞭をとつて居た。河原操女史は長野縣松本の藩士河原家の一人娘で長野女子師範を卒業すると、直ちに上京しお茶の水高等師範にはいり更に犬養木堂の創設にかゝる大同學校に支

那語を勉強した。三十六年春、こゝを終へるや單身上海に乗出し某女學校に赴任したのである。

當時北京の情報班では日露一戦を豫期して南北滿洲は勿論各地に計畫的に間諜を配置してあらゆる情報を蒐めて居たが内蒙方面には其手蔓がなかつた。そこで關係者が熟議の結果「女教師を王府に入れて軍事探偵とする」事になつて河原女史が其選に當つたのである河原女史は出發に際して、けなげなる覺悟を物語つた。

私が渡清の決心をすると同時に故郷に歸り、兩親の許しを受けることゝなつたが一人娘——支那——、蒙古の奥、——敵の中……、とても御許し下さるまいと心配しながら此譯を語る父君は非常に喜ばれ、

「今や國家危急存亡の秋、男子持つ親は君國の爲めに其子をして御奉公させられるも、自分には男子がない。實に申譯ない、相濟まぬと思つて居た矢先、ソチがお役に立つとは此上もないことぢや、世間に對しても肩身が廣い」と大喜び、母君も亦同様お國への御

奉公を喜ばれた。

いざ出發といふ時親子三人は佛前に別れの盃を汲み交した、と。

「私は郷里を發つ時からすでに覺悟して參りました。私が上海に赴任する際、兩親は私を佛壇の前に呼んで短刀と短銃を渡して下さいました。これは人を斬り人を撃つためではない、自分を斬り自分を撃つためだ、河原家の名を汚すなよ。日本女性の名を傷つけるなよ。わたしたちは、御前がお國の爲に出征したものと思つてゐる。わたしたちはお前が天子様のために死んだときけば、こんな嬉しいことはないのだ……」と訓して下さいました。

「この兩親のお言葉を體して七首と短銃は肌身離さず持つて居ります。たとへロシヤの兵隊に八ツ裂きにされるやうなことがございましても大切な御命令は、きつと守り通す覺悟であります。」とは何と云ふ力強い美しい言葉でせう。

かくて河原女史は祖國愛に燃えつゝカラチン王府に赴任し活躍し貢献してゐたのであるカラチン王府に着いた横川伊藤兩班の人々は日頃から日本最員で一行の通過を薄々知つ

て心待ちに待つて居たカラチン王の心からなる歡待を受け多大の便宜を興へられ風の音にも氣を配らねばならぬ身も此處ばかりは安心して手足を伸ばしてゆつたりとした休養氣分に浸つた。

横川班の脇光三氏の父淺岡一氏が校長であつた長野師範の出身で在校中も卒業後も絶えず淺岡家に入入して居た河原女史、はからずも下田歌子女史や内田公使の紹介で此王府に招聘されたのであるが奇しくも其脇氏と此異郷に會せんとは實に偶然で之も何かの縁にてかたゞ一人異郷に淋しく暮す時之を訪ふ同胞があればそれが知合であるとなにかゝわらす心から優待して互に母國を語り合つて故郷を偲びたい、と云ふ心持は其境遇に置かれたものが知る心情であつて廣い蒙古にタツタ一人、故郷戀しく暮してゐる河原女史としては特別任務班の一行がよし知らぬ他人であつたとしても出来るだけの待遇は惜まなかつたであらうに特に内田公使からの紹介狀をもつた重大任務を帯びた人々であるのと、光三サンとその子供時代に可愛がつた恩師の息脇が成人して一行の中に交つてゐるとい

ふことが河原女史にとつては一入の喜びで、何事にも不自由勝な蒙古の奥で一行に對する女史の心遣りは眞に涙ぐましいものがあつた。

烈士の活躍を語る河原女史

静寂なる後宮の奥深くに悲壯な決心を抱いて起き臥してゐる河原女史が入蒙以來やうやく二ヶ月を経た時に日露兩國の宣戰は布告されたのであつた。それから間も無い明治三十七年二月二十八日、女史の日記中に

「空は晴れたれども風ありて寒さは堪へ難かりき、例の事ども終り、窓に倚りて暮近き空を眺むるに、興安あたり灰色の雲低く動きて鴉は聲も立てず飛び去り枯枝吹く風肌さむし……………」

かうした感傷を誘ふ夕暮に學堂内の女史が居室へボーイがあわたゞしく這入つて来て、紙に包んだものと封書一通を差出し「今日支那人が多勢入府致しましたが其中の若い一人が之を先生に差上げて呉れと申しました。御存知の人でせうか」と云つた。女史は急ぎ開

封して一息に読み下すと、終りに「脇光三」と署名してある。

特別任務を帯びた一隊が来る事は女史にはすでに早く内報があつたところでは無く、かねてから重要な打合せに懸命なる活躍をしてゐたのであつて、今日あたりは來着の筈、まだかくと待つてゐられた際なので、

「あッ先發隊が無事に當地まで到着されたな」と一人肯いたのであつたが脇氏が一行中に加はつてゐることは女史にとつても意外であつた。

脇氏の手紙には「カラチンに立寄ることは、途中にて申聞けられたる次第にて貴姉に御目にかゝれるなどは夢にも思はざりき。若し北京にて知るを得たらんには何かなおみやげを持參すべかりしを、残念に存じ候日本人の變裝なる事の發覺を恐れ候へば今晚は差控へ明日參上御目にかゝるべく候」とあり。行程はリーダーと班長次長以外には極秘にして此處迄潜行されたものである事が知られる。一行が日本人たることの發覺を恐れる不安は女史に於ても同じであつたから其日はたゞ「御安着を祝す」とのみ認めて一行の旅宿である武

備學堂へ届けさせ女史は動搖する心を押へて何くはぬ顔で後宮内に歸つた。

其一行と云ふのは去月十七日、女史の入蒙を待ちかねたやうにカラチンを退去した伊藤柳太郎少佐をリーダーとし當時助手として勤務してゐた吉原四郎氏等の第一班と、日本戦史に悲惨壯絶なるページを加へて魂はハルビン原頭に鎮まり今も尙祖國を護るかと思はれる横川省三、沖禎介、手紙の主脇光三氏等十二名の日本人である。

當時の露國が世界に恐れられた強大な國家であつたことは今日のソビエツト・ロシヤだけを知つて居る人には想像もつかないほどであつた。其上露國は、明治三十三年北清事變の起つた時、馬賊が横行するからと云ふ口實で滿洲の要處に條約を無視して勝手に軍隊を送つてゐた。其の實力的強味もあつたのであらう。列國の協定に背いて自國だけで清國との交渉を開き特別の秘密條約を結んで全滿洲の利益を獨占しようとした。

我國は英國と同盟して露國の非をならして日本の立場を無視した露清密約を漸く撤回させる事はさせたが露國は口先では承知して置きながら實際に於ては滿洲から撤兵せず、甲

の地では撤兵したと見せてそれを乙の地點に移しゴマカシばかりをして其間にズント／＼實勢力を扶植して行くのであつた。明治二十七八年戦役の際日本が血を以て占領した旅順を露國は獨佛兩國を仲間に引き入れて所謂三國干渉をした揚句、清國に返還させ、其後で自國が其旅順を租借といふ名義で譲り受け、日本國民をして痛恨骨に徹するやうな思ひをさせたのであつたが、それにつゞいて滿洲全部を我物にしようとしたのであつたのであるから我が國民の憤慨が其極に達したのは當然である。

「露國討つべし」聲のが到る處にあがつた。特に軍部内には皇軍の威力を示すは此際なりと勇躍するものが多數であつたが、此時の政府の苦惱は想像以上であつた。露國が世界の大国である事、軍隊の勇敢を以て知られてゐる事、諸軍備の充實してゐる事、軍資の豊富なる事、シベリヤ鐵道の輸送力が意外に大である事等が政府の決心を鈍らせるのであつた。開戦派と非開戦派とが極秘の裡に論議して舌端火花が散るばかりだつたといふことである。當時北京の公使館内に於て内田公使、川島浪速氏、青木大佐等がしば／＼密議をこら

した其青木大佐名を宣純といひ頭腦明敏、思慮周密、且數ヶ國の外國語に通じ支那側にも好感を持たれてゐる人であつた。

この青木大佐と川島浪速氏との間に案出された「特別任務班を編成する」と云ふ方策が暗號電報で參謀本部へ飛び、許可と激勵も亦暗號で飛來し時を移さず其計畫が運ばれた。之は女史が入蒙以前の事で女史の入蒙がそれに關聯してゐることは勿論である。

この特別任務班員の數は赤穂義士に因みて四十七名と定められた。從屬する班員は、いづれも川島浪速氏等推舉の決死の志士の中から極秘裡に選ばれたものでその人達は何れも殉國の意氣に燃え悲壯なる喜びに勇躍してゐた。所が或日北京八旗中學堂（日本の學習院に相當する學校）の教官である陸軍豫備少尉堀部直人といふ人が殉國の志を押へかねて青木大佐を公使館に訪ねて來た。堀部少尉は熱誠を色に現はして「不肖ながら軍籍に身を置く私は今回の戦役に未だ召集のないのを残念に存じまして日夜神に祈つて居ります。

承りますれば特別任務の計畫が立てられましたとか、是非共班員の一人に私を御採用下

「さりたい」と懇願した。けれども此時の青木大佐は特別任務班編成の眞否さへも口にしなかつた。ましてや堀部の願意に諾否の答所では無かつたらしい。この事は祖國愛にもえてゐた堀部を極度に失望落膽させそれからは煩悶懊惱を續けてゐたが日露の國交斷絶となり宣戰が布告されて全日本國民の血が一團となつてたぎり立つた二月十二日の翌日、再び青木大佐に迫つた。

けれども大佐の態度は前回と少しも變らず、堀部を全く絶望させてしまつた。

けれども之は青木大佐としては當然の處置だつたのである。秘密中の秘事としての計畫であつて四十何人以外に知る人は無い筈であるのと堀部直人といふ青年紳士は大佐から見れば一教育家であり（志願兵を経て豫備少尉）親しく人となりを知つてゐた間柄でも無いし一方露探の暗躍は日ましに深刻化して來るといふ折柄の事とて大佐は特に慎重なる警戒から打明けなかつたのであつたが堀部少尉は煩悶懊惱の末、十四日未明に學堂教官官舎の一室で遂に武人切腹の作法により其上ピストルで頭を打ぬいて壯烈な死を遂げた年三十

歳、眉目秀麗な少壯軍人であつた。

友人であつた松崎、若林の二志士と、青木大佐と故郷の兩親に宛て、それ／＼遺書を認めてゐたが、すべて一死報國の機會に漏れたことを遺憾とする意味であつた。兩陛下の御尊影を前にして東南方に向いて息も絶え／＼になつてゐた時、見つけた人の知らせによつて青木大佐、川島浪速氏等も馳せつけたがさすがの英雄豪傑も落涙を禁じ得なかつたといふことである。

友人若林は其手を取り、耳に口あて、

「オイ堀部、早まつたことをして呉れた。併し君の死は決して犬死にはさせん。君の其心持は我々同志にはよく判つて居る。屹度君の志を遂げてやる。」と堅く手を握ると、

既にこと切れて居ると思つて居た堀部氏は、さも嬉しげに目を見開き聲も微かに

「祖國の爲めだ。何卒成功して呉れ！……頼む。」後は言葉なく微笑をたゞへて靜かに眠るが如く逝つた。

同志協議の結果、死せる堀部氏も特別任務班の一員に加へる事になり其短刀とピストルとは親友の懐に抱かれて晴れの任務に参加する事になつたのである。

此堀部少尉の濺いだ血が入選して將に出發しようとする志士をいばかり激勵した事であらうかと感慨深く思はれる。

脇光三氏の心情と女史

三月一日には兩班の日本人全部が王府内の河原女史の部屋に招待されて日本茶と日本菓子子の饗應を受け、一同日本に歸つた様な心持がすると喜び合ひ他人を交へずに心置きなく今後の方針などを打合せ、あとは互に雑談に耽つたが話題はいつも内地に引きつけられ勝であつた。

それからといふものは此室をこの上ない安息所として一行はそこに集つては再び味はふ事の出来ぬかも知れない日本氣分に浸つた。

わけでも脇光三氏は久振に懐しき河原先生に親しく御目にかゝる機會を得たのを此上な

く喜び眞に親に會つた様な心地しかねなく氣にかゝつて居た父への傳言を依頼したのである。

「河原先生、僕は東京を出發する時、買物や色々の用事に取り紛れて父に逢はずに來ました事が大變不孝であつたと今更氣にかゝつて堪りませぬ。」

「そんな御心配は要りませんよ。種々な御用がおありになつて御心任せにならなかつた事は御兩親もよく御解りになつていらつしやいますよ、しかし私があなたより御先に歸朝する様になればその御心持をよく御傳へして置きますわ。」

「僕は北京を出てから以來道々この事が氣にかゝつて仕方がなかつたんですが今先生に申し上げて胸がスーツとしました。」

「御旅行中は御身體を大切にして下さいよ、しめつばい靴下を穿いてゐると凍傷に罹りやすいからしめつたのはよく乾かしてからお穿きなさいよ、それから宿屋で温突オンダツをあまり熱く焚かせると頭痛がしますよ、大切な地圖はよく中懐に入れて支那人などに見られな

い様になさいます、まあ私としたことが、あなたをいつまでも子供のやうに思つてホ、ホ……………」

「あゝ實に愉快だ、先生！、大いに働きますよ、そして萬一の時には立派に死にます」
 「ほんとに御立派な御覺悟ですわ、御両親が御聞きになつたら、どんなにか御悦びでせう然しそんなことがなく大任を果して無事に御歸りになることを私は明け暮れ祈りもしますが何分危険な御仕事ですから萬一の場合には御覺悟通りロシヤ人が驚くやうなことをして日本男兒の立派なところを遺憾なく見せてやつて下さいませ。」

「やります、大いにやります。」

先生にも、もう二度と御目にかゝることも出来ずまい、何年振りかに御目にかゝつて嬉しかったのも一寸の間で、これがまた一生の御別れになるなんて、實際人生といふものは妙なものです、先生、もし僕が死んだといふ便りをお聞きになつたならば脇光三はお國のために笑つて死んで行つたものと思つて下さい。」

「……………」

蒙古王府の孤燈影暗く搖ぐ一室に決死國難に赴かんとする青年と、單身異郷にあつて日本女性のために氣を吐く女丈夫との奇遇、眞に劇的な情景であつた。

此時の事を女史から淺岡一氏へ報知した書翰の中に、

「光三様、今度の御仕事は實に浦山敷存候私も男子ならば此の御一行に加へて戴き度候にと残念に存せられ申候」

尙また、

「光三様には、よう支那人に御化けなされ候御訪ね戴き候折、きたなき服にて失禮と仰やられ候まゝ其心にては未だ支那人としては十分ならず今一層垢つきて光る位に成り又半風子とかいふ蟲でもお捕り成さる様になればよろしきよし申上候」云々。

ともある。

光三氏が徒らに豪傑ぶる粗野な人でなく禮儀ある慎み深い人であつたことが、これによ

つて窺はれる。

四四

さらに河原女史の慇懃なる中に、諧謔を弄しつゝ、激勵する心遣ひは殊に床しいものではないか。

因に一ヶ月半、蒙古の凍原を歩きつゞけ、風呂はもちろん顔も洗つたことのない彼等の肌は、垢がぼろ／＼剥げてとれさうだ。長い間の缺食と憔悴と、風雪に痛みつけられてきた彼等の顔はドス黒く土色に痩せ細り、ひげは蓬々と伸びて目ばかりぎよろ／＼光つてゐる。支那服も蒙古服もボロ／＼に破れてどう見ても乞食姿である。と記されてあるのを見ても志士達の苦心の程が察せられるではないか。

河原女史自刃の覺悟で活躍

特別任務班を出發させた三月三日から九月の末まで河原女史は露國側の策動を偵察しては軍部に報告し、蒙古民の情勢に變つた事があれば通信して我軍部に警戒させたり機先を制せしめるやうに努力したのは我軍にとつては多大な便宜であつた。従つて親露派の官吏

が女史に對する疑ひと憎しみとは何時となく加はつて來たが王室の教育顧問といふ公職を帯びてゐる人である爲に、表面からは手の下し様も抗議の出しやうもないものであるから暗殺を企てたり毒殺を目論む者も出て來て女史の身邊は實に危険を極めた。それを王妃が細心の御注意を以て庇護せられたので幸に異變を生じなかつたが女史としては十分の覺悟を決め、何時仆されるやうな事があつても死後の見苦しくないやうにと、いつでも肌着まで清潔にし荷物はキチンと整理して學堂の教務其他も其日／＼が最後になつても差支ない様、整然と處理しておかれた。

「萬一の場合は露人の手などにかゝつて最後を遂ぐるやうな事なく、美事に自刃せん覺悟にて國を去るにのぞみ父より援けられた懷劍を寸時も離す事なくピストルは身近く備へおけり」

と日記に書かれたのは其頃の事であつた。

この女史の一方ならぬ勳功を賞でさせられての叙勳、女ながらも天晴れの報國、實に感

四五

激の至りである。

因に此カラチン王妃は肅親王の妹君で非常に聰明な御方で日本最員であつたことが誠に天祐といふべきである。

烈士の難行路と最後

一行が思ひがけなくもカラチン王府に於て河原女史の心盡しの饜應を受け、種々便宜を得たが此懐しき邂逅も東の間、重大任務を帯ぶる身の一時も速く出發を急がねばならなかつた。白皚々たる雪の原、吹雪を突いて雄々しく進み行く勇士の後姿を淋しく窓から見送つて居た女史は、じつと堅く唇を咬んで居たが、知らず／＼熱い涙が頬を傳つて居た。

如何に御國の爲めとは云ひながら、彼のお姿は……祖國愛にもゆる彼の勇士達、どうせ生きてお歸りにはなれぬであらうと敵中死を恐れぬ流石の女丈夫も人目を忍んで咽び泣くのであつた。

一行は最初興安嶺の鐵道の迂廻せる箇所を破壊するのが目的であつたが雪の爲旅行困難

と聞き二隊に分れる事となつた。

死なば諸共、と誓つた一行は互に別れることは辛かつた。併し、目的遂行の前には私情は論ずる處ではない。年長の横川氏と伊藤氏とを班長にして横川班はチ、ハル方面に伊藤班はハイラル方面に向ふことになつた。

神ならぬ身の生死の岐路誰か之を知らん、之ぞ眞に人生の運命である。此世の別れに最後の一盃をと云つても勿論一滴の酒のある筈はない。水盃と云つても水筒の水は凍つて無い。仍で雪掻きよせて團子を作り、之を口中で解かして飲む、之が最後の別れの水盃であつた。

死なば諸共と誓つた勇士と勇士の別れ……口には出さねど心中は千萬無量、互に悲壯の言葉を交しつゝ右と左に勇姿は吹雪の中に消えて行くのであつた。

さてチ、ハル方面目指した横川班の一行は、目的達成の鐵道爆破の日を四月三日と期して駒を速めたのであつたが、路は名に負ふ人煙稀なる蒙古の原、飢と寒さは身に迫り、

露營の夢も結ばれず、互に抱き合つて其体温により胡沙吹く原の夜を明したことも一再ではなかつた。

併し、寒さや飢で斃れては犬死だ、重大任務を果す迄は斃れてはならぬと互に勵まし合ひながら一行は目的地指して急ぐのであつた。

方角も分らなくなつて疲れた馬や人が吹雪の中を後戻りしなければならぬ事幾度かあつて、つらい難行路を重ねて漸く北滿洲の地へと踏入つたのである。

此邊りは露軍の警戒が特に嚴重だと云ふ事を途中で耳にしたので喇嘛僧蒙古人の假装を怪しまれないやう注意の上にも注意して漸く秦春と云ふ處まで到着した。

此處から目的地チ、ハル迄は幸ひに故障なく行程を進める事が出来れば三日目には行きつく筈であるから、志士達の心は此夜、どのやうにか悲壯なる喜びに躍つた事と察せられる。北京を忍び出たのが二月二十一日、秦來についたのが四月六日、五十日近い辛苦の明け暮れでさへいたましいのに、行く手は死の覺悟を以て向はなければならぬ場所であり

事業なのである。一行は此處に慎重なる準備を整ふる爲、休養かたぐ二日を過ごし、いよく明朝は出發と定めた七日深更まで議を開き誓ひを新にした。

一、今後は敵の警戒一層嚴重なるべきに由り、林野山谷を通過して東支鐵道沿線に潜行する事

二、極力各自身を守り第二、第三の行動をとる事

三、敵に發見されたる時は各自臨機の行動に出で、最後の一人なりとも逃げて鐵橋破壊を遂行する事

四、不幸敵に捕はれたる曉は日本に有利なる陳述をなし敵を脅威して護國の鬼と化する事

五、鐵橋破壊は四月十一日深更より十二日未明までに決行する事

六、萬一失敗したる時の再會地点を小庫倫左岸の高所と定めおき其處まで後退する事

以上を申合せて秦來を出發した一行は翌日も又翌日も敵の監視と北滿の寒氣とに脅迫されながら、やうやくたどりついたのはトルチハ停車場とヤール河との中間にあたる位置で

小高い丘の麓に住みすてた土人の房子（小屋）があり小さい流れさへ近くにあつて誠に屈
 竟な屯所と思はれた。それで其夜は其處で過す事と決めたが、若し秋晴の日にでも丘の上
 に立つて展望すれば遙かの向ふには目ざすフルヤルジー大鐵橋が黒龍のやうな姿を横たへ
 てゐるのを見ることが出来たであらう。言語に絶する北地の長旅を續けて一人の變心者も
 病傷者も出さず敵の監視をも逃れ了せて今漸く目的の場所を肉眼に望み得る地点までたど
 りついた事の喜びは一行の人々の胸にいかばかり熱い血を湧きたゝせた事かと想像される
 のに、あゝ天情無山

こゝは敵守備兵の駐屯所から程近い場所だつたのである。けれども磁石一つを頼りとし
 てゐる一行に、そうした事の解りやう筈がなかつた。直ちに天幕を張る者、焚物を集めに
 行くもの人夫の一人は丘を越えて流れに水汲みにと出かけた。それは正に明治三十七年四
 月十一日の夕暮、午後五時過ぎの事であつた。

此時一人が

「アツ、汽車だ―」と叫んで指す方を見れば憎や、寸時も頭から離れぬ敵の汽車、而も直
 ぐ目前を、人も無げに車聲轆轤南下して居るではないか。誰かゞ叫んだ。

「チエツ、遅かつた。彼の列車には多量の人馬、兵糧、彈藥が積み込まれて居る。それが
 今後どれだけ皇軍を悩ますか知れぬ。今一日早かつたら決して此まゝ素通りはさせなか
 つたものを」と。

齒ざりしながら恨めしげに汽車を眺めつけて居るものもある。

此夜は此處に宿營することゝしボーイに命じて残る僅かの粟で粥を炊かせ最後の晚餐を
 共にし、種々打合せの結果、明朝未明に松崎、中山、脇、田村の四名は鐵道偵察に出かけ
 ることゝし、草を褥に靜かな眠に入つたのであつた。併し、其夜、夜中頃から降り初めた
 雪は風を交へて吹雪となり、雪は天幕の隙間を漏れ入り來り寒さが身に泌みる。まして、
 起きても忘れられぬ敵の鐵橋、牙へわたつた皆の腦裡には其鐵橋が幻の如く映じて何時迄
 も眠れないのであつた。

十二日の未だ明けやらぬ雪の野原を吹雪を突いて雄々しくも出て行く松崎等四騎の後姿を見送つた横川、沖兩人の眼には熱い涙が浮んでゐた。暫く後で、横川は沖に向つて、

「オイ、沖君。愈々目的を達するも今日か明日だ。男子の面目こんな痛快なことはないね」
 「真個だ、彼の鐵橋を一つポーンとやつけたら露助共ビツクリして随分慌てることだらう。其報せが北京に達したら皆がどんなに喜ぶことだらう。」

二人は嬉しさと感激の涙に咽ぶのであつた。然るに運悪くも此朝トチハル驛に駐屯せる西部總司令部に屬するシワネバツフ中尉は部下のコサツク、ゲヂン軍曹に鐵道沿線巡邏を命じたのであつた。

而して、命を受けた軍曹は部下を従へ午前五時頃、吹雪を侵してトチハルの驛を出で南方に向つて一里半邦里の地点に來た時（午前六時―七時迄の間）目の前に流れて居るヤール河の畔に怪しげな天幕を發見したのであつた。天幕の中で此近づく物音を聞いた横川、沖兩烈士は思はず「ア、しまつた」と云ひざま、急いで地圖や鉛筆を隠して、平然を装つ

て居たのであつた。入口に立つた巡邏隊は劍を突きつけ、銃を擬して、天幕の中を覗き込んで見ると、髭は伸び、顔も衣も垢染みた喇嘛僧がニヤ／＼笑ひながら平然として端坐して居る。

「オイ、お前達は何處から來たのだ？」

荒々しく云つてみたが一向答へようとしなかつた。「露語は話せぬか？」

之にも答へがないので、軍曹は何時もの蒙古から哈爾濱の司令部へ敬意を表しに來る喇嘛僧だと信じ軍刀を鞘に收め、部下を促して天幕を出て行つた。

横川、沖兩人は思はず顔見合せホツとした。軍曹が今將に乗馬しようとした時、後から天幕を出て來た一人の部下が軍曹を呼びとめて

「巡邏長殿、彼の喇嘛僧は少々怪しいですせ。」

「何が怪しいか？」

「彼奴の持つてゐる湯呑みは、あれは彼奴等の持つものではありません。」

(横川氏等は瀬戸ヒキの湯呑みを持つて居た)

馬に乗ろうとして既に手綱を握つて居た軍曹はそれを聞くと、再び天幕の中に戻り、そして直ぐに二人を連れ出して来て、

「何れにしても此喇嘛僧だけを司令部に連れて行くことにする」

斯ふ云つて二人に同行を求めた。二人は巡邏長が云ふまゝに無抵抗で同行を諾したと傳へられてゐる。多分これはすでに覺悟を決めてゐた爲であつたであらうが此際多少の抵抗をしたり躊躇する事が全く無意味であるばかりでなく、其爲に時を過しては今にも立歸るであらう他の四名の班員達をも亡ふ事になるとの深い思慮からでもあつた事であらう。

此間人夫どもは外の灌木の繁みの中に隠れてゐて助かつたと云ふ。それから二人はトチハル驛に連行された。そして其驛から恰度東行の汽車が發車するので、それに載せて富拉爾基の總司令部へ送らるゝことゝなつた。總司令部へ着くや、軍曹は直ちに司令官メチャーク大佐に此旨を報告すると、大佐は一應二人を引見した。

如何にも落着き拂つた其姿は紛れもない喇嘛僧なので、何時もの蒙古廟からやつて來る珍客だと信じ將校室に案内させ町重に取扱ふ様に命じたのであつた。

併し其後で二人を同行して來た軍曹から詳しい報告を聞取る中に多少疑はしい点もあるので兎も角後に残して來た支那人達も一應連行する様に命じたのであつた。

北京の闇を忍び出て以來、心身の辛苦を重ねて漸く目標の地点を肉眼で望み得る程の所まで近づき、今夜こそは驚天動地の大爆破に敵軍の膽を寒からしめやうと期してゐた際口惜しくも捕はれ、雪を踏んで敵の陣地へと引かれ行く兩士の胸の中!!想像するも涙である。命を受けた杜爾齊哈の中隊では、シワネバツフ中尉自ら部下を率ひて現場に向つたのであつた。

嫩江鐵橋偵察に出かけて、斯かることゝは露知らぬ松崎等四烈士は、鐵橋附近の状況を充分に調査し時こそよけれ一時も早く此事を横川、沖兩氏に傳へ今夜の中に最後の目的を決行せんと、喜び勇んで天幕の方へと急ぎ歸り見るに、こは如何に横川、沖兩氏は拉致さ

れて姿無く敵兵は今にも再び残りの者を捜査に来るに相違ないと云ふボーイの悲報に接し
 四人は互に顔見合せて悲憤の涙に暮るゝのであつた。死なば諸共と誓つた間柄だ。どうし
 て此の儘じつとして居れよう。未だ遠くは行くまい後追ひかけて命の續く限り闘つて二人
 を取戻すか。いや、それはもう無駄な事だ。それよりも隠して置いた爆薬を取出し、
 四人で直ちに鐵橋に向つて目的を達成するより他途はない。

そうだ。時を過しては失敗に終る。

天幕から少し離れた處に蒙古人の古い墓がある。そこへ携へて來た大量の爆薬が隠して
 あつた。意を鐵道爆破と決めた四人が之を取出そうと其墓所に近寄らんとした時であつた
 遙か彼方に鐵蹄の響き、續いて聞ゆる銃聲、シワネバツフ中尉幕下の精銳が天幕眼がけて
 突襲して來たのであつた。

敵は正しく多勢、味方は僅かに四名のみ。早くも彈丸は處構はず頭上に飛來する。悲し
 や寸鐵を帯びぬ身の今は全く絶對絶命。花々しく敵中に躍入つて斃るゝは易きも、それで

は帯びた重大任務が果せない。

残念ながら、一旦此處を逃れ、捲土重來、之より他に途はない。要は死よりも目的達成
 だ、そうだ！

此時早や目前に迫つた敵の十字火を浴び乍ら四烈士は支那人ボーイ二名と蒙古人の道案
 内と共に、馬に鞭あて西を指して逃れ去つた。

x

x

x

露兵歩度を伸せば烈士達も歩度を伸す、歩度を落せば烈士達も亦歩度を落す。凡そ三四
 十露里も追ひかけた頃露兵は遂に諦めて引返して行つた。

斯くして四人を捕り逃した露兵は、天幕の中は勿論、附近を當り隈なく細心の注意を拂
 ひつゝ捜査すると、驚くべき大量の爆發藥や、爆發要具が墓場の中に隠されて居るのを發
 見した。さては日本軍の恐るべき鐵道爆發隊であつたナ、と今更驚き乍ら大功を立てた
 一行は凱歌をあげて兵營指して引揚げて行つた。

虎口を逃れた松崎氏等四烈士は雪の荒野を逃れ續けること三日三夜、勿論喰はず飲まず人も馬も疲れ果て、漸く人家に辿り着いて見ると、村人達はスハ、露兵から注意のあつた馬賊團の襲來と計り銃手槍、棍棒等を手に、四烈士を包圍せんとするので、無念や一椀の食を求むることも出來ず、暫時の休息をも許されない有様であつた。

老獐なる敵は四人の落行く先々の村々に、人を派し、獐猛飽くなき馬賊が來るから氣をつけよ、來たら之を捕へよ、捕へた者には莫大の賞を與へん。斃した者にも賞與する。と達ししてあつたのである。

四烈士は最早や此上逃れ度くはなかつた。只氣にかゝるのは、鐵橋、爆藥、重任、寸時として忘れる事は出來ぬ、されど一帶の雰圍氣は益々險惡である。或る山の鞍部に差かゝると、何處に隠れて居たか、急に撃出す土人の一齊射撃に馬は斃され身に重傷を負つた者も出來る始末。

數日の間、飲まず食はず今此不意の射撃を受けて遂に憤りに燃えた烈士達は、疲れたる身を躍らせて鬼の如き土人を投げつけ擲きつけ獅子奮迅の働きも、哀れ多勢に無勢、終に殘虐極まりなき土人の群の中にて悲慘、悲壯の最後を遂げたのであつた。

只此亂闘に中山のみは身に數ヶ所のいたでを負ひながら如何にもして此事を日本軍に報告し度い、此凶報を日本軍に報せねばならぬと云ふ責任觀念に燃えつゝ、未だ膚寒き興安嵐に深手淺手を負ひたる身を曝しつゝ、只張り切つた精神力丈けで倒れては起き、起きては倒れながら果しなき荒野を敵の追撃を逃れつゝ、或る蒙古の一軒家に辿りつき疲れた体を杭の上に横たへて此家の主人の情の白湯一椀をやれ嬉しやと飲まんとする刹那、ドヤ／＼と押入る土人の一隊に捕へられ哀れ此處の露と消えたのであつた。

噫、四烈士恨みを呑んで蒙古の果て興安嶺下に斃れて、其英靈は胡沙吹く荒野に永久に眠れり。

去れど、盡忠報國、大和男子の大精神は御國の精華として永劫に消ゆる期はない。

其後、橋口大佐の一行は四烈士の遺跡を尋ねて懇ろに其英靈を弔ひ、之によつて四烈士の壯烈なる最後は世に知らるゝに至つたのである。

偉哉、彼等が死を以て示した殉皇大義の精神は永遠の歴史を通じて皇國を護り皇威を恢弘し世界を宇となすまで脈々として流れ盡きぬであらう。

二人の最後

横川、沖の二人はロシア兵に護送されてチチハルを経てハルビンに着いた。こゝで軍法會議が開かれたが裁判長はじめ係官一同、二人の實に立派なる悠々たる態度に肝をつぶしたといふ。さもあらん。

「日本には七度生れて七度賊を滅すと云ふ信仰がある。われ等兩名、死刑の宣告を受けるとも魂魄は天にあつて必ず露國の暴虐を撃滅して見せる。」

この堂々たる答辯、憂國の熱情と信念に満ちた自若たる態度に皆胸を打たれた。

愛國の熱誠と身を挺して國に殉せんとする悲壯なる決死の覺悟にむしろ畏敬の念さへ覺

えた。裁判官は齊しく二人の武人としての立派な態度と國を思ふ烈々たる精神に感激し、できることなら生命だけでも助けてやりたいものと思つて早速總司令クロバトキン將軍に裁判の報告と共に助命電報をうつた程である。

奉天からの訓電で、

「敬意を以て銃殺に處すべし」

と決定されたが敵側をしてかく迄に感せしめたる二人の偉容察せられて誠に敬慕の情に堪へない。四月二十日愈死刑執行、

其前晩のことである。夕食が終ると今日裁判長になつた將校がつかつかとやつてきて、「何かいひ遣しておくことはないか、何なりときゝとゞけてやる」
敵味方を超越した親しいものに對する愛情に満ちた言葉でたづねた。

「いまさら何も申上げることはありません、たゞこゝに聊かの銀と手形とを持つてゐます
これを貴國の赤十字に寄附したいと思つてゐる。お取計ひ願へないでせうか」

横川は二個の包みを前にさし出した。

將校は意外な申出に驚いた様子で、

「貴君等は郷里に妻や子があるといふではないか、本官は責任をもつて、この金を日本に
をる貴君等の妻子に送りとどけよう」

と親切をもつてきつ返した。

横川はきつぱりと――。

「貴官の厚意は感謝するが、その必要はありませぬ。日本においては 天皇陛下のために
死んだものには、妻子眷族の生活は國家が保證してくれます。そのご心配は無用です。
なにとぞこの金は貴國赤十字社に寄贈願ひたい」

この毅然たる美しい言葉に將校は深く感激した。彼は感動に満ちた言葉をもつて、

「貴君等が日本、 天皇國に生れたことの幸福を余も祝福する」と敬虔な面持ちでその包
を受取り、家郷への通信があるならばと云つて用箋とペンをおいて立ち去つたと云ふ。

ハルビン郊外の小高い丘の中央に白木の一丈もあるやうな太い杭が二本打ちこまれた。

横川、沖兩名の死刑執行場である。

天皇陛下萬歳――

大日本帝國萬歳――

二人は聲を張りあげて叫んだ。

その聲が終るか終らない瞬間、

――撃てッ――

轟然たる音響、立ちのぼる硝煙。

愛國、殉皇の二勇士は立派な最後をとげ、どこしへに護國の神となつたのである。

今此の感激の地に志士の靈を慰め弔はん爲大紀念碑が建てられ永く護國の神として祀られ
てある。碑を眺むる者はそゞろ往時を追懷し、俯仰低回去る能はざらしめるは誠に當然で
ある。

あゝ勇ましきかな殉國志士!!

後に聞く。

彼の時の裁判長の述懐に

「余の一生の中、あの時ほど感激したことは前後にない。」と。

實に立派な日本武夫である哉。

敵をかく迄に感激させるものは抑々何であろうか。

日本精神!、これこそ

世界人をして等しく驚嘆せしめるものであることを銘記すべきである。

今や彼等志士昇天の靈は今日の滿洲國更には大東亞建設の礎となつてほゝ笑んで居てくれることだろう。

烈士の遺功

横川、沖、松崎、中山、脇、田村の六烈士、その目的を達し得ざる内に、或は敵に捕は

れ或は蒙古人の兇刃に殞れて悉くその屍を滿蒙の平野に横たへ護國の鬼となつた。但し其目的を現實に達し得なかつたとはいふものゝ、彼らがその東清鐵道沿線に出没したこと、横川、沖の捕縛されたことによつて

「東清鐵道沿線に日本軍の間諜頻々として出沒鐵道線路破壊を企てつゝあり」

と云ふ噂を生み、ために露軍を震駭させ、前線の行動を鈍らせたことは、蓋し究極の目的を達し得たものといふべく、日露戦役における六烈士の大功績であり、燃ゆるが如き報國の赤心が我國民に大なる刺戟を與へたことは故國のために残した六烈士の大なる功績である。

噫、六烈士死して餘榮あり。

日露戦役當時高輪御殿に在したる常宮、周宮兩内親王殿下には戦病死者を憫み給ひ、其報道ある毎に一々御記帖遊ばされる中、上は將官より下は輪卒に至る迄肩書がありしに、横川、沖兩人のみ之なきをいぶかしみ給ひ、その何故なるかを御下問遊ばされしを以て側

近者に二烈士の事績を言上せるに、御二方とも御熱涙に咽ばされ暫し御顔もお上げ遊ばされざりしが、やがて御筆を取り給ひ、二人の名の上に忠君愛國之士と御筆を染めさせられ尙別の板には御自ら筆をとらせられ、墨痕いとも鮮かに忠君愛國之士横川省三、忠君愛國之士沖禎介と御染筆の上、御邸内の大石良雄外十六士の舊跡の丘にある一亭の戦死者を祭る祭壇に祭られ、朝夕御禮拜を賜はりたりと洩れ承る。寔に無上の光榮に轉た感泣する次第である。勿論、六烈士は共に靖國神社に神として仰ぎ祭られ横川、沖兩烈士は勳五等に松崎氏等四烈士また勳六等に叙せらる。

明治四十一年五月には東京音羽の護國寺に六烈士の碑を建立せられ、長崎縣平戸の沖禎介氏の出身地には沖圖書館設置せられ、大正十一年ハルビン郊外二烈士處刑の跡には六烈士を合祀する處の志士の碑が建設せられた。(寫眞參照)

而して志士の碑建設當時は長くも 大正天皇には烈士の報國盡忠を御思召され、横川、沖兩烈士に對し特に從五位の御沙汰を賜つた。

昭和四年横川氏の出身地盛岡市の公園には横川省三氏の銅像が建てられ、脇光三氏の出身校拓殖大學には學生の醵金による同氏の碑が建設せられた。(同上)

哈爾濱郊外志士の碑は北滿唯一の名跡として誰れ知らぬ者なきに至り、苟くも哈市に一歩を入るゝ者にして此碑に參拜せざる者なく、露人、滿人にして參拜する者すら見受けらる。事變後、參拜者頓に増加し、最近に朝夕參拜者絶ゆる事なき有様である。

尙昭和九年に六烈士事蹟保存會によつて其周圍に五萬坪の公園を築り名實共に整つたものとなつた。

而して其後毎年三月十五日、此碑前に於て關係者多數相會して横川班の慰靈祭典が営まれてゐる。志士の英靈も定めし地下に安んじ微笑んで居られることであらう。

六烈士の事跡を回顧するに、事は志と違ひ、あたは壯圖も失敗に終り、如何ばかり残念であつたことか思ひやるさへ涙を催すのである。然し此一舉あつて後、露國をして全戦役間、貝加爾以東の鐵道保護のため、歩騎兵各五十餘個中隊を配置し、第一線の兵力を減殺

するの己むなきに至らしめたことは何としても偉大な功績であつた。且つ後世の人々を感奮せしめて精神を振作する點に至つては更に貴いものがある。

因みに淺岡一氏の四男小四郎氏は曾て郡司大尉とカムチャツカに航し、遠洋漁業に従事し、後に清國大沽で歿せられた。

勇邁の氣象は淺岡家の血統に流れてゐるものと見える。今は一氏の七男猷七郎氏が光三氏の後を嗣いで居られる。

死後の餘榮と詩歌

明治三十九年三月に、三十七年四月十五日附で陸軍通譯脇光三氏に對し、明治三十七年戰役の功に依り勳六等單光旭日章及金千圓を賜はつた。また同月二十七日に淺岡一氏に對し故脇光三氏の戰功に依り金千圓を賜はつた。尙茲に諸名士から光三氏の實父淺岡一氏に寄せられた詩歌を録す。

○當時脇氏の絶筆のことを聞き

御歌所長高崎清風大人の歌

かたみにとつけておくりし唐草に

大和心の花そにはへる。

○下田歌子女史の歌

國の爲めと思ひたえてもたらちねの

みおやのもりのなけきをそ思ふ

○安部弁磐根翁の歌

すく／＼と千里かけりしますら雄の

心の駒のいさましきかな

ことしあらは火をもふまんと思ひりし

心のあとも見ゆる道かな

あまかしたたれか仰かぬ國のため

われとくたけしたまの光りを

○土屋鳳洲翁の悼脇光三の詩

雪虐風饑幾苦辛

田心許國夙忘身

興安嶺月松江水

照得忠肝萬古新

○竹内東仙翁の詩

蹶然投筆起

死以贊皇猷

名與山河久

興安松華頭

○帝國教育會長辻信松翁は光三君の辭世に次韻して六烈士を弔した。

其第一句は常宮周宮兩内親王殿下が六烈士の姓名に冠せられたる忠君愛國之志士てふ文字を拜借したのである。

忠君愛國士

先天下憂憂

夙有所畫策

一死贊皇猷

壯烈鬼神哭 遺芳百世流
雨寒華水岸 雲暗興山頭

兄弟中の現存者

長兄、淺岡眉壽鷹氏は三年前死去せられ、次兄（脇光三氏は三男）四男既に亡く五人目が女の方で現存

浦和市の南澤岩吉陸軍少將の令夫人（和歌さん）

五男が淺岡五郎氏で外務省勤務にて現在南方に活躍中、（外國語學校卒業通譯官）

六男が淺岡六郎氏で滿洲藝文會館に勤務中（京大卒、經濟學士）

七男、猷七郎氏にて脇光三氏の後繼者となつて居られる。現在、佐原で齒科醫開業。
（本年四十才）

令妹の述懐

脇光三氏の御兄弟は男七人、女一人と云ふ立派さであるが光三氏は其三番目、五人目が御令妹和歌さんである。

現在浦和市外根岸に（陸軍少將南澤岩吉氏夫人）居られる。親しく訪ねて思出話を承つた。

「光三兄さんは、とてもやさしく可愛がつてくれました、特に育ての親を大切にしましたことは私どもの感心して居た所です。其養母と云ふのが實によく出来た賢夫人でありました。光三さんの養育には萬全の愛撫を以てせられ、躰け方は兩親とも嚴格でありました家庭内の行儀作法はもとより交友につきても細心の注意を以て當られたのであります」「あの友達は良くない、あゝ云ふ友をつれて来ては家名にかゝわる。」

「あの友達は良い、あゝ云ふ人を親の友達とせばよい」等とあくまでも我子の將來の爲、眞の養育愛に眞心をこめられたのであります。

このお蔭で光三さんは圓満に成人し人々に可愛がられる様に仕立て上げられたのであると思ひます。そして常々私に向つて

「女は何れ成長の後には他家へ嫁ぐものであるから今の中に良く親孝行をして置かなければならぬ」

「衣服の整へ方はかくく、下駄のぬぎ方はかくくと小さい点まで教へてくれました。女としてはいつも凡てに細心の留意が必要である」等、それはく親切に教へてくれたものです。

自分が脇家で仕込まれたその實際を私にまで及ぼしてくれたことどもを思ひ浮べまして懐しく忘れることが出来ませぬ」。

友愛の情、濃かであつたことが察せられてゆかしく思はれる。

河原女史の述懐

四十年後の今日、在東京の一宮鈴太郎氏（元正金銀行重役）夫人としての河原操女史を訪ふて往時の思出話を伺つた。

純然たる軍事上の功勞によつて勳六等に叙せられ寶冠章を賜はつたのは婦人としては我國に於て河原女史を以て最初と云はれてゐる。

さすがに苦勞人だけあつて實に良く出來た圓滿徳行の人その謙遜な態度には一入感服した次第である。

往時を回想しつゝ感慨深い面持にて語られる。

「脇さんの御父さんは私の先生であつたので御宅へも時々伺ひましたが、とても可愛い、良い御子さんでしたよ、くるくるとすゞしい眼………で、おだやかな温みのある子でした實、養父母に對して實に親孝行でした。あれやこれやと常に御母さんを慰めて居なすつたことを見受けまして、ほんとに感心し御心持を察すると涙が出ます。

東京出發の際にはいろいろ用達に忙しく御父さんに親しく御暇乞をしたいと思つて居られましても中々思ふにまかせなかつたのです（當時御父さんは華族女學校へ御勤務中でした。）夜歸るとすでに御休み中だし翌朝又早出しなければならぬし其中に約束の日時が來

てしまつたのです。そこで支那へ來てからも常に氣がかりであつたと見え。どうか私にかはつて御父さんにおわび下さい、とのいちらしい真心こめての御話に、

「あゝ何と云ふ可愛い、親孝行の人だろう!!!」と思つて涙ぐみました。

「確かに引受けました」と申しますと非常に喜び。

「お蔭さまで重荷を下した心持です。」と、

それから服装についても「似合ひますか？」支那服、べん髪、「とてもよく似合つて居りますよ」。

「帽子もうつつかり取れませぬよ」

「失禮ですけど」と申されて居た其勇ましい御様子が今も眼前にちらつきまして「とても懐しそうな感慨に胸を打たれました。

更に、

「其頃の青年は實に眞剣であつた。「死」なんてたまで考へて居なかつた様です。それで

こそあの大胆な行動が出来ましたのです」と付け加へての話し、成る程と感を深くした。

純忠の意氣に燃え立つ丈夫の魂こそ日本精神の顯現である。尊い哉。

親友の述懐

母校（拓殖大學）在學當時寄宿舎に於て寢食を共にされた親友星野桂吾君の話しに

「脇君は冒険、壯舉を敢てする所謂豪傑型の男とは毫も認められなかつた。其風格は寧ろ當時のハイカラの方であつた。さりとして今日のモダン型では勿論なく端麗な青年紳士型であつた。

日本中學の出身で中學時代は美少年として持てはやされて居た、優しい心の持主で殊に無邪氣な子供が好きであつた。

脇君が出入に近所の子供達を可愛がり幼き友達に慕はれ延ひては其家庭の人々から女中子守達にも及んで此等の脇君の名さへ知らぬ人々も君の北京出發には泣いて別れを惜んだ

君は實家、養家の家庭は勿論、學友交友の間其他凡ての環境に於て、君の玲瓏玉の如き圓滿無碍なる性格は今日尙ほ思慕されてゐるのである。私へくれた數多い書翰の中、壯圖を前にして當時北京にあつた脇君からの手紙をはからずも本箱の中から見出し、母校に於ける記念碑除幕式當日參列し感激の涙にむせんだのである。

其手紙

「其後如何、相變らずの筆無性、何卒御免被下度候、江戸は定めて春景色愉快々々と云ふ内に御暮しの御事と存上候、北京はくさいくさいの内に閉口仕居候、

たまにはよき御話を御聞かせ被下度願上度、時に御試験にて御忙しいだんべい。餘り御勉強は御毒、支那語はシツカリ御奮發專一と存候、小生は日本人の集合所に居る事とて一向進歩致さず閉口、然し之も勉強すればとは存じながら……

△△兄は如何せられしや、非常に無沙汰したからよく兄より詫をたのむ、何れ後から御詫旁々伺ふと御傳へ被下度候

光三拜

協君を偲ぶ

渡邊氏が母校に脇光三氏記念碑建設ときいて詠める。

いつかした我等がほこる剛健の

精神にふさふ君が記念碑。

丈夫の雄心しめし校庭に

君が記念碑 おごそかに立つ。

附記

日露戦役當初悲慘なる最後をとげた六烈士は以上の如く國民の典型、祖國愛の權化として萬人崇敬の的となつて居り、此大和民族の大精神は今や世界平和、人類幸福の基調となつてゐる。之に反し當時二烈士逮捕の責任者、メヂャーク大佐は其後軍功により中將の榮職に累進し個人としては稀れに見る名將軍なるに拘らず、今は本國中六尺足らずの体を入

るゝ處もなくラトビヤ國に國籍を置き哈市に淋しき老後を送つて居り、又烈士の裁判長たりしアファナシエフ少將は後中將に進みホルワツト將軍の東清鐵道長官時代には副長官の榮職にあり、伊藤公遭難當時我が 天皇陛下より勳一等の勳章を賜りたる程の高位高官の身でありながら、今は哈市の一角某家の三階の一室に老後を送り令嬢は某商會に勤務せしめて居ると云ふ。之又同情に絶えぬ半生である。更に二烈士の銃殺の責任者であつたシモノフ大尉（後に累進して少將となる）七十餘歳の老軀を哈市大直街の秋林商會酒庫の門番として其日を送つて居る。

三人何れも勳功の老將軍でありながら、何故如斯末路を辿つて居るのであらうか？是れ云ふ迄もなく最近迄世界の強大國を以て誇つて居た露國が其誤れる共產主義思想の跋扈による亡國の悲哀を如實に物語つて居るものといふべきである。

茲に思を致すとき我等は生を皇國聖代にうくる幸福を感銘し各々職域奉公、挺身報國、鴻恩の萬一に報すべき覺悟を寸時も忘れてはならない。

日清戦役によつて日本の存在を認められ、日露戦役によつて一躍世界の一等國として輝かしく讃へられ、大東亞戰によつて世界第一の優秀帝國と進み來つた我が大日本、偉なる哉。

惟ふに之れ祖宗の神靈の御加護と、大御稜威の下、皇國民の忠誠、勇武、挺身報國の賜なることを忘れてはならぬ。

我等は先進烈士の偉勳を偲び、祖先以來承け來れる大和魂に愈々研きをかけ鍊成以つて後進者にゆづるべき責務があると信ずる。

現下各地に續々と郷土を中心とし或はゆかりの地に烈士顯彰の美舉を見る。清き鑑とや云はむ。

今や脇光三氏の忠靈は

一、活動舞台たりし北滿ハルビン郊外に

忠烈士之碑として記念され多くの人々に敬仰せらる。

二、出身學校たる東京拓殖大學校庭に燦として輝く紀念碑として建てられ後進學徒を導く

鑑として敬せらる。

三、出身郷里たる當彦根市に於ても熱情溢るゝ裡に今日顯彰碑の建設を見る。

「故郷に錦を着て歸らるゝ思ひやすらむ」

とこしへに芳しく祀らるゝことゝなつた。

重なる榮譽、朽ちざる名聲、

蓋、君の一死報國忠誠の賜である。

希くは安かに瞑せられんことを。

今回顯彰建碑と共に我等の脇光三氏を偲び、功績を稱へ廣く紹介せんとして此冊子編纂の事に當つた。元より微力にして眞の烈士脇光三氏の全貌をつくすを得ざるを遺憾とす。

幸にも大方諸賢の一方ならざる御芳情を忝うして此刊行を見ることが出來た。

茲に重ねて深甚なる謝意を表する次第である。

○追記 脇君を知り共に活躍せられし在大阪の藤井石童氏より感慨深く寄せられたる書状

(前略) 今朝の大阪新聞所載によれば脇光三君の傳記御編纂の趣時局下誠に結構の御事に存上候就ては小生も往事を回顧して今昔の感に堪へず一言を寄せ申候、小生今年七十五、日露戦前或要務を帯び北京にあり或編輯を開始し横川、沖禎介君と往來す。而して沖君の依頼により脇光三君を編輯助手として我家に備へり。

正直で極めて勤勉家であつた。

間もなく小生は急遽歸朝の要を生じ歸朝中に日露戦役勃發、再び東京より芝罘に至り小生の家を取調べさせしに全員北方に行けり……即ち小子も覺悟して我軍の特別任務に服して戦役終了迄盡瘁せり。

當時余は三十五才、脇君は二十一二位の白面の美少年なりし。

只今新聞記事を見て忽然として當年を回顧の儘、茲に一言を寄せ申候。

一月十一日

○脇光三氏の御妹和歌さんから寄せられたる歌

支那に行く兄に代りて

父母君に仕へよと教へ遣し、を、

和歌上

ありし世に教へたまひし言の葉は

今はかたみとなりけるかな。

特別任務班々長青木大佐が烈士家族に送られたる書状

拜啓未得拜晤ノ榮候得共益御清康奉欣賀候扱故禎介君御殉難ノ御事績ニ付テハ疾ニ御報道可致筈之處其任務軍國ノ要機ニ關シ遽ニ發表シ難キ事情モ有之乍遺憾今日迄差控居候然ルニ平和克復ノ今日愈名譽ノ戦死者トシテ公然發表モ有之候ニ付此時機ニ於テ聊カ同君殉國之願末左ニ開陳仕候

明治三十七年一二月ノ交日露ノ國交將ニ破レントスルノ時ニ候ヒキ北京ニ於テ特別任務班ノ組織セラル、ヤ故禎介君ハ他ノ有志諸君ト共ニ慨然奮起盟テ王事ニ盡サントノ熱誠ヲ以テ進テ命ヲ奉シ殊ニ困難ナル任務ノ配當ヲ受ケラレ横川省三、松崎保一、中山直熊、脇光三、田村一三等ノ烈士諸君ト共ニ諸種ノ準備ヲ整ヘ二月中旬奮然北京ヲ發シ湖北ノ野ニ向ヒ御潜行相成候時恰モ嚴冬ニ際シ祁寒骨ヲ砭シ積雪脛ヲ没シ天地暗憺滿目荒寥ノ境ニ出沒サレ飢渴ヲ忍ヒ百難ヲ排シテノ御行動御困難之狀實ニ察スルニ餘リアリ候斯クテ五十餘日内外蒙古ヲ横斷シテ四月十二日杜爾齊哈停車場附近ニ到着セラレ將ニ豫定ノ壯舉ニ着手

セラレントスル折柄不幸敵國巡邏兵ノ物色スル所トナリ禎介君ハ横川君ト共ニ敵手ニ陥ヒ
 リ哈爾賓ニ送ラレ後軍法會議ノ審案ヲ經テ從容義ニ就カレ爾他ノ諸君ハ辛フシテ厄ヲ免レ
 再舉ヲ圖ラントセラル、内四月十四、五日頃敵ノ教唆ヲ受ケタル貪慾無智蒙民ノ爲メニ非
 命ヲ遂ケラレシモノ、如シ是ハ當時該地方ニ行商セル支那人ノ報スル所ニシテ信ヲ措クニ
 足ルモノニ有之候書シテ此ニ至レハ悲憤滿腔血湧キ肉躍ルヲ覺ヘ御遺族方ノ御痛恨諒察ニ
 堪ヘス候左ハアレ諸君ノ此ノ如キ壯舉ニ依リ敵軍ヲシテ全戰役間具加爾以東鐵道ノ掩護ニ
 步騎兵各五十餘中隊ヲ常置シ爲メニ其第一線ノ兵力ヲ減殺セシメタルハ顯著ナル事實ニシ
 テ我軍ノ全作戰上ニ至大ノ貢獻ヲ致サレタル事ニ有之候是ニ依リ烈士諸君ノ英靈モ幾分滿
 足サレタル事ト信シ竊ニ慰藉罷在候然レトモ諸君遺烈ノ及ブ所ハ更ニ大ナルモノ有之其純
 正ナル忠節其凜乎タル所謂大和魂ノ精華ヲ發揚セシモノニシテ千載ノ下猶懦夫ヲシテ起タ
 シムルニ足ルモノニ有之明治聖代ノ歴史ニ一大光彩ヲ放タレタルモノト確信仕候御遺族方
 ニ於テモ此邊御洞察ノ上幾分御安意被下候ハ、仕合ト奉存候先ハ烈士諸君殉難ノ次第御報

申上度特ニ奉得貴意候

敬具

明治三十九年五月

依命歸朝中

於東京

陸軍砲兵大佐 青木 宣純

沖 莊 藏 殿

烈士脇光三氏顯彰事業概要報告

大政翼賛會彥根市支部ニ於テハ客年八月二十日ノ役員會ニ於テ本市ヨリ出シタル日露戰
 役殉國ノ烈士脇光三氏ノ偉勳ヲ顯彰シ時局下本市青少年教養ノ資ニセントノ議一決シ先ヅ
 顯彰碑ノ建設ト偉績ニ關スル冊子ノ刊行頒布ニ着手スルコト、ナレリ同年十月顯彰碑建設
 並ニ寄附募集ノ許可ヲ得タルモ時局下經費ハ能フ限リ節減シ専ラ精神ノ籠レル少額ノ淨財
 ヲ多數ノ篤志者ニ俟ツノ方針ニヨリ町内會長各位ノ盡力ニヨリ僅カ一ヶ月ニシテ所期ノ金

額ヲ募集シ終リタリ。

十一月中旬偉績調査ノ爲委員ヲ東京其他關係地域ニ派遣シ資料調査ヲ遂ゲ本年四月「烈士脇光三氏傳」ト題シテ小冊子ノ刊行ヲ了シタルヲ以テ爾後廣ク學生生徒一般ニ頒布シ大イニ顯彰セントス。

ハルビン滋賀縣人會ニ於テモコノ舉ヲ壯トシ本事業ニ對シ大イニ後援スベキ旨報告ニ接シタルハ洵ニ感激ニ堪ヘザル所ナリ

二月十一日烈士ガ壯途ニ上リタルノ日ヲトシ本工事請負ヲ松居六三郎氏ニ委囑セリ。

三月二十一日地鎮祭ヲ執行翌二十二日着工五月二十五日竣工セリ碑石ノ題額ハ陸軍大將荒木貞夫閣下ノ揮毫ヲ得タルモノニシテ本年秋季ニ於テ記念講演ノ快諾ヲ得タルハ本市ノ最モ光榮トスル所ナリ。

本日除幕式舉行ニ際リ貴賓各位ノ臨場ヲ得タルト共ニ遺族各位ノ遠路態々來臨ヲ辱ウシタルハ衷心感謝ニ堪ヘザル所ナリトス。

以上

當日、遺族として參列せられし方々

○脇光三氏の繼嗣、(千葉縣佐原町居住)

脇猷七郎氏の子息、秀夫君

○脇光三氏の令妹 (浦和市根岸居住)

南澤和歌氏 (南澤少將夫人)

○脇光三氏の令兄 (東京市杉並區高円寺居住)

淺岡二郎氏 夫人 のぶ氏

遺族各位には感慨特に深く感謝感激の涙に咽ばれし様を見、泉下の光三氏も定めし御満悦のことゝ一入の感に打たれた。

除幕式次第

祭典

- 一、修 祓
- 二、降神之儀
- 三、除 幕 (遺族)
- 四、献 饌
- 五、祝 詞 (神官)
- 六、玉串奉奠
- 七、撤 饌
- 八、昇神之儀

式次

- 一、開式之辭
- 二、宮城遙拜
- 三、國歌齊唱
- 四、祈 念
- 五、式 辭 (市長)
- 六、工事報告
- 七、感謝狀贈呈
- 八、祝 辭 (來賓)
- 九、述 懷 (八木原少將)
- 十、遺族挨拶 (遺族)
- 十一、閉式之辭

以 上

式 辭

本日茲ニ御遺族並ニ貴賓各位御貴臨ノ下ニ烈士脇光三氏顯彰碑除幕ノ式典ヲ舉グルニ至
リタルハ誠ニ欣快ニ堪ヘザル所ナリ

願フニ脇光三氏ハ日露戰役ニ於ケル殉國ノ志士ニシテ稀ニ見ル至誠純忠ノ士ナリ 明治
十三年十二月一日淺岡一氏ノ三男トシテ生レ 幼ニシテ脇家ノ養嗣子トナル脇家ノ舊彥根
藩士ニシテ養父ハ藩ノ士弟教養ニ任ゼラレタル高潔英明ノ人ナリトス光三氏脇家ニ人トナ
ルヤ至純至孝刻苦勉勵克ク修養ニ努メ明治三十三年日本中學校ヲ卒業シ軍人タラントセシ
モ胸圍狭少ノ故ヲ以テ不合格トナリシヲ遺憾トシ發奮興起大イニ身体ヲ鍛鍊シ現拓殖大學
ノ前身タル臺灣協會學校ニ入學ス 同三十五年六月退學シ直チニ北京ニ赴キ清語研究ノ爲
東文學社ニ入リテヨリ深ク沖禎介氏ノ信賴スル所トナリ遂ニ其ノ學社ノ教習トナル三十六
年日本語學校ヲ創メシモ久シカラズシテ之ヲ廢シ更ニ天津ニ下リ北支那毎日新聞社ニ入リ
華堂ト號シテ編輯ニ從事シ令名世ニ顯ル 既ニシテ日露ノ風雲急ヲ告ゲ三十七年二月戰端

ヲ開クニ至ルヤ奮然特別任務班ニ參加セリ 同氏ノ屬セル班ハ即チ横川省三ヲ班長トシ沖
 禎介氏外三名ヲ班員トセルモノニシテ脇氏ハ實ニ其ノ最年少者タリシナリ 二月二十一日
 悲壯ナル決意ノ下ニ北京ヲ發シ風雪酷寒ヲ犯シ苦楚萬嘗深ク敵地ニ潜入シ言語ニ絶スル難
 行路ヲ突破シ五十余日ニシテ目的地タル東支鐵道ノ鐵橋地帯ニ進出セシ際不幸敵ニ發見セ
 ラレ横川、沖兩氏ハ敵ニ捕ヘラレ脇氏外三名ハ不撓不屈萬難ヲ排シテ再舉ヲ企テシモ事竟
 ニ成ラズ却ツテ蒙匪ノ襲フ所トナリクローンボ附近ニ於テ屍ヲ曝スノ止ムナキニ至ル嗚呼
 惜イ哉 時正ニ二十五ナリキ

然リト雖モ六烈士ノ壯舉果シテ空シカラズ是ヨリ後敵ハ後方警備ノ爲多大ノ兵力ヲ割キ
 皇軍ノ利スル所甚ダ大ニシテ其ノ功績誠ニ偉ナリト謂フベク芳烈ハ萬古ニ朽チザルベシ
 宜ナル哉 明治三十七年四月勳六等單光旭日章及金壹千圓ヲ下賜セラレ英魂ハ靖國ノ神ト
 シテ祀ラル、ニ至リタリ 今ヤ北滿ハルビン郊外ニハ六烈士ノ碑建設セラレ北滿鎮護ノ神
 ト仰ガレ母校タル帝都拓殖大學校庭ニハ脇光三碑相繼イデ建設セラレ後進學徒精神作興ノ

鑑トセララル 今又茲ニ郷里彦根市ニ於テ顯彰建碑ノ工成リ此ノ盛舉ヲ見ルニ至リタルハ大
 東亞戰下一億一心挺身奉公ヲ致スベキノ秋誠ニ欣快措ク能ハザル所ニシテ篤志者各位ニ對
 シ深ク感謝ノ意ヲ表スルモノナリ

本日茲ニ除幕ノ式典ヲ舉行スルニ際リ謹ミテ感謝ノ微衷ヲ陳ベ以テ式辭トナス
 昭和十八年五月二十八日

彦根市長 松山藤太郎

建碑除幕式當日

八木原少將閣下の述懐

脇光三君ハ日露戰役ニ於キマシテ沖、横川等六人ノ同志ト共ニ軍人ニ非スシテ第一線ヨ
 リモ、ヨリ危険ナ敵ノ後方深クニ行動シテ軍人以上ノ働キヲサレ其生命ヲ國難ニ捧ケラレ
 タ我郷土彦根出身ノ烈士デアリマス。

滿洲ニ於キマシテハ「ハルビン」郊外ニアルコレ等六烈士ノ碑ニ參拜スルコト、東京見物ニ泉岳寺ガ欠ク可カラザルト同様デアリマス。然ルニ從來其郷里彦根ニ於キマシテハ一向ニ知ル人モ少ナク全ク燈臺下暗シノ状況デアリマシタ之ハ藏ニ立派ナ寶物ガアリ乍ラ家ノ人ハ知ラナイノト同様デアリマシテ甚ダ遺憾ナ事デアリマシタガ今回松山市長ヲ始メ市當局ノ御盡力ト市民各位ノ御協力ニヨリマシテ烈士脇光三君顯彰ノ碑ガ此景勝ノ地ヲトシテ建設セラレマシタ事ハ英靈ノ御満足ハ勿論吾々市民トシテハ忘レラレタ寶ヲ新ニ發見シテ吾々奮起ノ資トシ又子弟教育ノ有力ナル燈明臺タラシメタルコトハ誠ニ欣快ニ堪ヘナイ處デアリマス。私ハ更ニ五十年近ク遡ツテ私ガ未ダ十三才ノ少年トシテ脇光三君否私共ノ云ヒナレタ呼ビ方「光さん」ガ十六才ノ青年トシテ一夏ヲ私ノ家ニ滞在セラレ共ニ「サデ」ヲ擔キテ大洞ノ野川ノ魚ヲ捕ヘ或ハ此道ヲ八景亭ヘ、樂々ヘ、城山ヘト散歩シタ當時ヲ追憶致シマス「光さん」ノ第一ノ特別ナ点ハ其眼デアリマシタ。特ニ大キク、スミ切ツテ鋭ク所謂眼光炯々ト云フ点デアリマシタ又熱情家デアリ友情ニ厚ク腕白ニ拘ハラズ兩親ニ

ハ柔順デアリマシテ只私ヨリ三ツ上ノ兄ト云フ丈ケデナク其言動ハ大人モ及バナイ程ノモノデアリマシテ既ニ後年烈士タルノ素質ヲ備ヘテ居リマシタ。天若シ之ニカスニ天壽ヲ以テセバ恐ラクハ國家ノ偉人トナラレタモノト思ヒマス。今英靈ハ正ニ吾等ヲ莞爾トシテ見下シ聖戰ヲ完遂ノ爲努力スル吾々ヲ援助指導サル、コト、信ジマス。

在ハルビン滋賀縣人會の美舉

大東亞建設の先驅者として夙に雄志を懷き遠く北滿に夫々皇國發展の爲、盡瘁精進せられたつゝある。我が郷土人士、ハルビンに於ける滋賀縣人會各位の活躍こそ、目ざましくも又力強いことである。

其ハルビン郊外、輝かしく光を放つ六烈士の紀念碑、雄々しくも挺身報國隊として義勇奉公、忠誠義烈の勳を物語る殉國烈士の碑を仰ぐごとに崇敬の念禁じ得ず感慨深く感ぜられつゝある我縣人、宜なる哉、我等の郷土滋賀縣出身の脇光三氏が其六烈士の中にありとは、何たる光榮ぞや、肩身廣く誇らしさを感じるではないか。

ハルビン記念碑に續いて東京拓殖大學の記念碑、近く出身郷里なる彦根市に於ける顯彰建碑を傳へ聞かれたる滋賀縣人會員は期せずして發奮興起、此顯彰運動に共鳴せられ、多大の御篤志を寄せらる。茲に於て、「烈士脇光三氏傳」を廣く天下に頒布し、決戦下、若人の奮起を念願せらるゝの美舉となつて表はれて來たのである。

さきに編纂刊行せし傳記は主として彦根市民の間に頒布せられしが今回、前述の御厚情により縣下は勿論、全國的に廣範圍に宣揚し日本精神の涵養資料として頒布するの幸を得たることを喜び、ハルビン滋賀縣人會各位の御芳情に對し深甚なる謝意を表する次第である。郷土の爲、皇國の爲、慶すべき一大快舉と云ふべきである。

希くは滿天下の心ある若人達よ、

挺身殉國の鑑は今、我等の眼前に掲げられてゐる。豈、奮起せずして可ならんや。

本傳記を讀まるゝ人々よ、篤志者の意の存する所を諒とし愈々感銘を深くすると共に第二、第三の烈士脇光三君の續出を希ふや切である。

高源寺に於ける墓碑建設

脇家先祖代々の菩提寺なる犬上郡大瀧村檜崎の高源寺に於ては、彦根市の顯彰運動に共鳴相呼應して、烈士脇光三氏の墓碑建設の計畫成り、祖先の墓側に光三氏の靈位を祀らるゝことゝなつた。誠にゆかしい、有難い催、定めし泉下の光三氏も祖先にまみゆる面目ありて欣喜瞑目せられることならむ。

仰ぐ天徳山の麓、琵琶の太湖を一望の中に眺め得る小高き景勝の地、由緒深き高源寺内祖先に對する大孝を全うせられたる光三氏の英魂は永へに我等の郷土を護り、後進子弟善導の鑑として、いよゝ輝きを見ることは實に敬服の念に堪へざる、うれしいことである。

因に同寺には彼の有名なる。至誠師道を全うしたる英傑、宇津木靜區氏の墓もある。共に稱へて師表とすべきである。

實父淺岡一氏の頌徳碑

脇光三氏の實父、淺岡一氏が卓越せる人格者であつたことはあまりにも有名な話である。同氏は二本松の藩士として名家に生れ、祖先以來繼承された武士道精神を深く體得し、尙ほ修學研鑽につとめられた學徳兼備、識見非凡の大教育家であつて長野縣を教育縣として夙に全國に冠たらしめたのは實に淺岡先生の御力であると折紙をつけられたのが杉浦重剛先生であることは、實に崇敬すべき事ともである。次に掲げる「淺岡一頌徳碑」の碑文は實にそれである。御遺族の方々の述懐の中にも「父はとても記憶力が強かつた。あの八犬傳を暗誦して居て時々聞かされたものである」と、又今から思ふと「一風異つた豪傑風の態度であつた」と。

「此父にして此子烈士脇光三氏あり」とは偶然ではないとなづかれるのである。

淺岡一頌徳碑

杉浦重剛 撰

大正元年秋冬之交余客遊于長野縣多與從教育之人交覺其學風與他異趣有甚得余意者焉因質其所淵源皆曰是淺岡先生之餘澤也余與先生有舊然未得盡其爲人更請問其評曰先生爲人氣骨稜々毅然有古武士之風至誠接物躬行實踐猶且宏度遠識加有才幹明治十九年任本縣尋常師範學校長兼學務課長又推爲信濃教育會長銳意多所釐革自是學風一變剛健尙武之氣研鑽不屈之概長於其間本縣教育之面目一新矣因案先生之閱歷先生名一二本松藩士明治六年以降或於文部省或於地方學務官常有所貢獻明治二十六年去本縣之後官于華族女學校更爲會津中學校長其所施設終始一貫如在本縣時今也先生齡踰古稀

優遊自適猶守晚節先生三男光三君出嗣脇氏曩殉難于哈爾賓世之所
 熟知也亦可以見其所養矣本縣諸氏之有此舉豈其偶然乎余應囑記要
 云

大正辛酉晚秋



發行所	印刷所	印刷者	編輯兼 發行者	昭和十八年二月廿五日印刷 昭和十八年三月一日發行 昭和十八年十二月廿五日再版
彥根市役所	彥根市本町 奧田印刷所 <small>(中岐一〇八號) 電話五五九番</small>	大垣市西外側町二丁目 奧田清二	大垣市本町四十六番地 大野源治友	

終

